

川柳の雑誌

Pensoj flugas trans la land - limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 448



9月号

九月号



川柳雑誌社主催

10月本社句会予告

玉 英 秋
つ 会 の
串 話 酒
兼題

本社川柳忌句会

初心者歓迎！

さあ、いらっしやい都心の川柳道場へ

日時 九月七日(月) 午後六時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題「命 日」(三題) 清水白柳選

「東 薄」(三題) 松江梅里選

「月 光」(三題) 正本水客選

「老 木」(三題) 傍島静馬選

席題 三題(当日発表)

柳話 麻生路郎

呈賞 各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 いさむ・南宗・文秋・甫佑・八郎・与呂志

清人・すゑむ・薫風子・柳雲子・母遊

★投句だけの方は郵券三十円同封

(〆切九月四日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪六七一局 六〇八一



国立公園 奥新和歌浦・雑賀崎

風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館

うおまたろ
魚又楼

TEL 和歌山 ④ 0431・0387

細胞活化

これが 疲れ 頑張りがきかぬ
心臓 息切れ・どうき
肝臓 肝炎・二日酔
筋肉 腰の痛み・神経痛
…に働く

アスパラは細胞活化物質です

アスパラギン酸・カリウム・マグネシウムのAKM常用効果が引受けます。いろんな症状の原因を体内に残さない。《酷使に耐える細胞》《活化した細胞》この細胞の蓄積が、ほんとうの健康体をつくるのです。

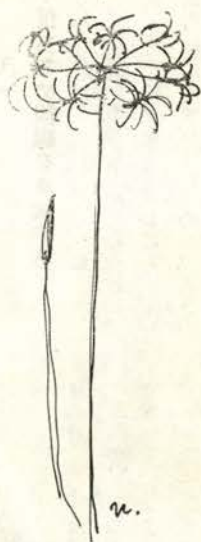
いつも健康体でありたい方 はやく回復したい方へ

アスパラ

錠剤 アンプル ドリンク

●疲労回復 ●心臓疾患 ●肝臓疾患
●妊娠中毒 ●二日酔 ●神経痛
●筋肉痛 ●腰痛 ●食欲不振 ●便秘
●秘病中・病後の回復 ●疲れ目
●脚氣 ●手足の脱力感 ●皮膚炎





不朽洞句帖

麻生路郎

何んでもウンウンで生きる手もある

元宝塚にいたという女でうなずかず

女がウジャウジャいたとしてもサバクだよ

酒にしました 暑さとはまた別の味

食えなくなると約束なんか忘れ

先に逝きますというのも明治型

科学にしても月のあはたは見たくなし

マッチの軸で収賄額を指示される

川柳雑誌★九月号目次

不朽洞句帖

題字：麻生路郎・表紙：野尻弘

麻生路郎 (3)

川柳名句抄の鑑賞

麻生路郎 (4)

蕪村気まま帖

東野大八 (16)

明治大正柳誌巡礼

奥津啓一朗 (36)

川傍柳初編研究(一)

丸十府・岡田甫

川端柳風・高須陸三味・前田喜代人 (12)

岡崎重義・清博美・藤井和雄

短詩型文学の将来性

八木摩太郎 (21)

五世川柳とその句(二)

阿達義雄 (18)

文蝶逝く

麻生路郎・清水白柳・西尾 栄・市場没食子

(32)

川雑川柳ゆかた会の記

▲「川柳まつり」優勝楯返還と永久保持

(26)

▲浴衣コントロール園秀作家一栄さん当選

柳志寸言

北川春 栗 (17)

大万川柳「けちんぼ」発表

本多柳 志 (25)

不朽洞の人々

甲吉氏の巻 (39)

★

川柳塔

麻生路郎 選 (6)

同舟近詠

諸 家 (11)

近作柳樟

麻生路郎 選 (21)

人生譜

北川春 栗 選 (30)

金泥集

河野春三 選 (35)

各地柳壇

麻生路郎 選 (41)

★柳界展望

(38) 不朽洞会から

清水白 柳 (39)

入門講座

戸田古方 選 (34)

一路集

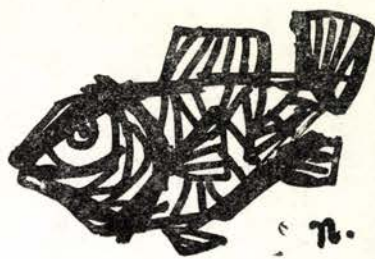
「異端者」 選 (36)

「ベターハーフ」

水谷竹 莊 選 (46)

★柳梅室

路郎生 (46)



川柳

名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔八〇〕
住込の一人になつく子を案じ

(清生)

十二、三の小娘、親の慾目か美しい。まだ色気はないが、住込み店員の一人になつているので、そのうちに、ひよんな関係でも出来てはと案じると言うのであらう。

お染久松式存在は今の世にも、すくなくはないので斯うした句が詠まれたのであらう。

〔八一〕
膝小僧ちちめ視線を意識する

(雄々)

電車の向い側に座席を占めてる女性に、この句のような情景をよく見かける。短いタイトで、膝小僧すれすれなのへ、異性の視線が向けられているのをフト意識すると、急に膝小僧をちちめている。時々、タ

イトを裾の方へ引つ張っているのを見かけるが、引つ張ったところで急に長くなるものではない。それほど気になるのならもう少しタイトを長めにすればいいのにそれはしない。むしろそうした異性の視線に彼女自身魅力を感じているのかも知れない。面白いネライの句だ。

ヨロメキのドラマ終ってさあ掃除

〔八二〕

(胡人)

主人を送り出した中年の妻は、テレビの前にドツカと坐り込んだ。映っているのはヨロメキのドラマである。

なんだか、若い頃に愛していた男とデートでもしていたような気分にとらえられて、ハットと呼吸を呑んだのであった。画面の結末はうれいものではなかったの、持っていたホコリたきを投げ出し、

さあこれからお掃除だと立ちあがったというのである。斯うした主婦の一時時が時々襲って来ることを、夫が知ろう筈もないが、主婦にとっては、おそろしくもあり、楽しくもある一時時なのである。主婦心理をうまくつかんでいる。

〔八三〕

幸福の絶頂にいる人喋る

(水客)

「オイお茶でも喫もうか」、とティールームに誘い込まれる。聞いていれば、彼は最近結婚をしたそう。財界で飛ぶ鳥を落す、A社の社長の三番目の娘で、一寸美人だよ、いずれ引き合すがネ。オレもA社へスカウトされたので、二、三カ月したらニユーヨーク詰だ。ボナナスは他社の倍かな。と、とめどなく喋べるのであらう。お茶ぐらいでは聞いていられない話の連続に顔をしかめているのも気づかないのである。喋べるのは一方的だが二人の表情を巧みにとらえている。

〔八四〕

ライオンはよしまなざしもたて髪も

(梅志)

ライオンは百獣の王と言われている。動物園のライオンはそれほどにも感じないが、あれで野に放たれた場合、まなざしは異様に輝やき他の獣類を射すくめるに足る威力を発揮することであらう。房々としたたてがみは彼ライオンの堂々たる偉容を飾るにふさわしいことも疑いのないところだ。彼の前に立っては人間もタジタジだ。動物描写の句だがいかにもライオンらしい力強い表現だと思う。

〔八五〕

香典と花輪悼むのは忘れ

(野迷路)

誰れそれが死んだそう。香典をやっておけ、それから花屋へ電話して花輪をやって置けという。花輪はあまり見苦しくないのがいいよ。ワシの名前にもかかわるかなという。それはおつきあいであり、自分のPRであって、かんじんの悼む心は、みじんもないのである。この句はそういう世相にぶつかった作者の公憤と見てもいいだろう。皮肉な句だ。

〔八六〕

パイプより短い距離に女寄り

(喜由)

暑かろうが寒かろうが、愛する彼氏と彼女はひとと寄り添うのが定石である。殊に女は愛撫のキスを今にも求めているかのうに顔を持って来るものである。その情景を「パイプより短い距離に女寄り」とは巧みな表現だと言えよう。

〔八七〕

銀行の級友尻のつつぱりにもならず

(春巢)

銀行にクラスメートがいる。いつ会っても、ネクタイを結んで身なりはキチンと

しているが、カガシに背広を着せたようなもので、われわれ級友にとっては屍のつっぱりにもならない頼りない男だ。赤字で困っていても知らぬ顔の半兵衛だ。またまた融通して呉れても、これはワシの金ではあるが、利子はもらっておくよと、キツチリ利子を取りくさる。友だちは友だち、金は金だと言うのである。それに違ひはなからうが友だち甲斐のない奴だと思つと、胸がツンが悪くなつと言うのであろう。面白いネライの句である。

〔八八〕

母の屍体と一緒に寝るとむずかる
児

(七面山)

この句を一読すると、まず新聞の社会面の記事がアタマに来て、想像をたくましくさせられる。

母の屍体という言葉から、常識的に考えて、病死とは思えない。他殺か自殺か、自殺なら毒薬死か、瓦斯自殺なのであろうかと、次ぎ次ぎに思いを走らせるのである。母の屍体と一緒に寝るとむずかる児の、そのがんぜなさにホロリと流す涙より先きに事件のウラへ心をひかれる句である。作者が警察に勤務されていられるので斯うした句が生まれたのであろうが、単なる報道川柳として捨てるのもどうかと思う珍らしい句の一例だと言えよう。

〔八九〕

遮断機が下りて運転手の煙草

(後江)

遮断機が下りたホンの束の間に、運転手がタバコを喫うたのをとらえた句だが、面白いと思つた。タバコを喫わぬ人から見れば、それがどうしたと思うかも知れぬが筆者のように、寸時もタバコを手から放さぬ者には、その気持に一脈通じるものがある。スピードが仕事である彼のような激しい生活者にとっては、その束の間が、救われる時間なのだ。トイレでも喫うほどの筆者も禁煙の場所では絶対に喫わないように、運転手も運転中は決して喫わない。こんなところにもタバコ喫みの共通の心理が働くのかも知れない。

〔九〇〕

冷房暖房からだきたえる事忘れ

(愛場)

冷暖房に限らず、日本人はからだをきたえる事がおろそかになったようだ。歩くということさえ、ウンと縮少されている。雑巾がけを単に掃除と考えるから、機械化されてゆく。機械化も、スピード化も、考へようによっては人類の敵だ。停電しただけでも、十何階の事務所への出勤は体力の問題だ。山登りだと言つて笑つてもいられない。この句から考えさせることの中は広いと言えらう。

〔九一〕

車窓から水田加減も見て戻り

(村談子)

土に生きる農夫の生活を詠んだ句だ。一寸した旅に出たのであろうが、その帰路で、車窓から先ず眼に映つるものは水田の加減である。満々と水がたたえられているのを見て、ホッと一息ついたのだ。平々淡淡たる句ではあるが捨てがたい情趣のあることは見過せない。

〔九二〕

人を呼ぶに明治の人は手を叩き

(光道)

そうだ、明治時代では家庭でも、あるじが家人を呼ぶのに、手を叩いたものだ。呼鈴を使う家は稀れだった。料亭でも旅館でも、仲居や女中を呼ぶのに手を叩いたものだ。はなはだ簡単で用が弁じられたものだが、いつのほどにか廃たつたようである。

銭湯でも熱つすぎると、手を叩いて水を出してもらつたものだ。時代は移るの感が深い。

〔九三〕

老夫婦をつまんだ
ままだ話し

(桂仙)

蛭をつまんでいる方は例外なく老婦人である。それも万年床の中の所作だ。「今日はいい天気だから、久しぶりに孫の顔でも見て来たらどうです」と言う。「そうやな。それもエエや

男までサンマのような靴を履き

〔九四〕

(静馬)

近ごろの男がサンマのような先の尖った靴を履いているを、何んたることであろうとタンクした句だ。近ごろの女性がサンマのような靴を履いているのもかっこうのいいものではないのに、それを真似て男までがサンマのような靴を履くとはもつての外だと言うのであろう。同感の人も多いからう。赤い上着を着たり、サンマの靴を履いたりイヤハヤである。男よ強くなれと言いたい。

大阪・名古屋・伊勢を便利に結ぶ

近鉄2階特急

大阪一名古屋ノンストップ

2時間13分

大阪上本町発……毎時0分

名古屋発……毎時30分

▶伊勢・名古屋ゆき

大阪上本町発……毎時15分

▶伊勢・大阪ゆき

名古屋発……毎時45分



特急券の求め方は日本近鉄各駅内所
21日前から
本ツースの各案

近鉄



川柳塔

麻生路郎選

金かけて貰うた免許で死なはった

兵庫県 小西 無鬼

又 孫出生

今朝生まれ一人前の欠伸する

フト醒めた汽車暫く逆行してた

我 神と共に在り邪を憎み

肩書がとれてのれんの潜りよし

大阪府 西 いわを

吉祥天虹を溶かした色の冴え

大阪市 北川 春 巢

既制服の合わせぬ体を云いふらし

銀行の級友尻のつっぱりにもならず

別れ話のベンチと知らず蝶が舞い

無趣味の日曜公園へ座りに来

新聞辞令にも書かれずに退職し

3DKに明るいグラジオラスの赤

病院長ご勇退に

聴診器悠々自適させとかず

副院長拜命

本職は医者やと我に云いきかせ

ハワイ 羽佐 間 柳 葉

金婚へ二人三脚底い合い

世渡りは直ぐいだけでも罵られ

豊中市 戸田 古方

これがソーナスバックミュージックに魅かれ

楽焼の焼ける間に本売場

こんな虫まで夏を稼いでいるらしく

黒い卓へ銀器おき玻璃器おき

大阪市 市場 没 食子

蔵王にて

一瞬の雨で蔵王は霧に消え

羽黒山にて

ほら貝で迎えてくれた羽黒山

運もよし尼公の珠子を頭に受けて

蓼科にて

蓼科湖残念乍らこゝも雨

美ヶ原にて

名のとをり勝景空気のうまいこと

志賀高原

放牧を一句もなく見て通り

西宮市 若本 多久志

田も畑も捨てた農夫の背広淋しき

見て貰うだけで花火は空に消え

下駄の売場訊いてさがして店の隅

大阪府 川村 好 郎

やっと連れて出た妻の目に青葉

お兄さんと呼んでくれたよ旭町

いい方にとろうと思う心の淋しさ

ねだってる声に女店員も照れ

もっと早う来いと集金断られ

つまらないしゃれもマダム以下笑い

大阪市 正本 水 客

団体のみんな静かにカンビール

人生に暗転というものがほし

螺旋階段の真上にも青い空がある

幸福の絶頂にいる人喋る

まな板は電化にならぬままの音

高槻市 若柳 潮 花

孫抱いて出るエネルギーだけは持ち



堺市 吉田圭井堂

近代化つばめの来ない国にする

水のない都へ世界を呼ぶ度胸

おないどしの医者ですっかりうまが合い

有名人と添うて振られて名があたり

あめ玉で使いにやった子が博士

防府市 長野井蛙

汗尊と明日のくらしが保証され

警官も生身ビストルには勝てず

大阪市 太田良子

神経や年やと云われて瘦せてゆき

精一ばいの抵抗をしたらしい死

岡山県 直原七面山

せんべい布団にかつての名妓

嫁ぐ娘へ父もビールを酌いでやり

罪みんなかぶって逝った課長補佐

鳥取市 河村日満

小豆島雨でくすぶる中に着き

どしゃぶりとなつてもカメラ持ち歩き

小豆島コースどおりにせかせられ

豊中市 足立春雄

並び大名の一人にさえもなりたがり

だまされているを知りつつ利那主義

何時しかに職場はみ出す人となり

倉敷市 木村千容

表装はするでなかった鼻につく

足ることを知れと七七誕生日

年輪にふれたまわらず神の杉

政治屋のトップ会談人間無視

加賀市 野村味平

痛いほどつめられボックスの灯は暗く

ハネムーン満期の銭で来た熱海

ボックスの造花も汚れて場末の灯

真知子と呼ぶ針っ娘も去りにけり

大阪市 木村水洞

日本も広しナイターと豪雨禍と

生活力があつて夫また変り

能率の低下を悟る齢になり

大阪市 後藤梅志

役に立つものは木切れでもとっておく

ライオンはよしまなざしもたて髪も

自転車は盗られ夕立には出合い

すゝむ氏の還暦

還暦にせめて眼鏡の縁をかえ

米子市 小西雄々

空港へ来てもせわしい時の人

ベテランが見れば小癪なニューフェイス

膝小僧ちちめ視線を意識する

加賀市 那谷光郎

この席は敬語づくめで酔い切れず

メモをした手帖も祖父は置き忘れ

スタイリスト笑いの中をけつまずき

坪何万に売れるよ雑草生やしとけ

大阪市 福井野迷路

香典と花輪悼むのは忘れ

傘借ろうとも貸そうとも云わず

住む蠅も捕る人間も精一杯だ

岡山県 浜田久米雄

雨降れば降つたで別の草が生え

ニュースだけ欠かさぬことにして暮し

妻いとし沸く田の中へいどんで出

つばめまた平和な家と知って生み

はじめての卵は父に差し出され

大阪府 清水白柳

バス降りた隣家の主婦と歩を合わす

職人の猫背は名人といわれ

光るもの光らせて居てひっかかり

いずれはここへ入る身の草をひく

基参



出雲市 尼 緑之助

派閥派閥とつまり動物

お上手な嘘が儲けにつながって

いきなりどやされる無口な運転手

八等身夏の姿のワンピース

大阪市 水谷 竹 莊

嫁がせてもとの二人になる我が家

パトロンが変り屋号も又かわり

切られては死ぬ役ばかりのエキストラ

夜汽車またのしもたれあつて寝る

冷蔵庫男が開ける生ビール

京都市 大 鶴 喜 由

うちのハートは目下からっぽ誰か来て

パイプより短い距離に女寄り

父の皴洗えば昼の砂ほこり

人間も精子もチャンスを待ち

尼崎市 小 林 文 月

出張のうちにボーナス決って居

一本だけのマッチが点かず詮もなし

門真市 福 島 鉄 児

ネクタイを締めて暑さを口にせず

金貯めて遊びも知らず死にはった

会長と家事が併行してくれず

岡山市 服部 十九平

食パンの耳を残して言葉キザ

混浴を出てお化粧に念を入れ

岡山市 大森 娘 句 楽

新潟の地震が持株まで響き

創価学会信じきる程野暮でなし

総裁の椅子へ読み程来て呉れず

炎天へ食う為の汗かきに出る

汗かいて遊ぶ若さは過去のこと

西宮市 若 林 草 右

金使う氣力が失せて金ができ

善意だけでは病氣治りかね

岡山市 田 村 藤 波

お隣を誘うて行った日は釣れず

協力は尊しいも虫蟻が引く

見島市 本 田 恵 二 朗

詩を愛し詩を抱きよみの国へ発ち

見合写真勝負をうだと値踏みされ

京都市 松 川 杜 的

トラック止め暫しを蟬の下にねる

ポイントがやけにガチャ／＼厭近し

ギョーゲン街根よく舞妓待つカメラ

鳥取市 森 本 法 泉 子

弔増田耕民

川端に一本残った柳枯れ

苔寺にて

一日をみどりの褥にねてみたし

桃山御陵にて

山陵へみんなが尻をむけて撮り

乃木神社にて

乃木神社明治生まれの行くところ

松原市 小 池 し げ お

ホテルから帰り英語でものをい、

泥棒もチボも背広でいたホテル

片親のない娘は一輪差しが好き

堺市 高 崎 雄 声

サングラス外せばやさしい父であり

島根県 藤 井 明 朗

爆発事故高度成長ひずみが出

未亡人の若さにむらがる涼み台

倉敷市 野 田 素 身 郎

振り返るのも面倒な蒸し暑さ

参観日というのにわが子居眠りし

海水浴胸毛に人気さらわれる

芦屋市 丸 川 初 甫

親切も程々ですと女の眼



サービスにお天気を云うお寺さん

青春の火花もライバルあつてこそ

岡山県 池田 古心

嫁にきて無いから百姓致しません

大阪府 早川 清生

ミロのビーナス見る列京の美に触れず

芸術の前に鉛筆削る用

住込の一人になつく子を案じ

高校生の中に小さいのが教師

大阪の目抜支店の街と化す

客蕎と猫とを愛すバリの後家

堺市 辻 圭水

出張の会議もでずに麻雀し

暑さだけでもあますとはうらやまし

奈良市 宮口 笛生

東尋坊地獄のぎょうそうに似てそそり

湯の町の情緒下駄の緒がゆるみ

九谷焼きらびやかさにひけとらず

画になって太陽落る山があり

鳥取県 田中 蛙眠子

原則のとりことなつて小官吏

高原の霧から美人は生まるもの

一〇W消してからふと悪意満つ

神戸市 仲どんたく

ああ来たらこう云うたろと経営者

お隣りの天才教育鳴りはじめ

青信号競馬の馬の様に出来る

平田市 久家代 仕男

文明のひずみ美観は無視される

泥濘でいつまで続く低姿勢

歓待をせねば工事の捗らず

出雲市 原 独仙

能弁と駄弁が戻る市場籠

免許証もつ娘が優先的に売れ

夏期手当ボン／＼と女事務

新潟県 高野 不二

家からの電話へそっけない課長

不美人のマネキンこれも流行か

字も知らず礼儀も知らず大学出

大阪市 石倉 旅風

雨垂れの音が昼寝をながびかせ

電子の目パチリパチリで色気無し

哀しさは修道院にさえ嫉妬

大阪市 魚住 満潮

続・西成界わい

顔パスでストリップの木戸通る

学業を捨てて博徒の家を継ぎ

夫婦喧嘩殴ぐられたのは亭主なり

愛媛県 村上 旭童

親族をよせて生木をさくつもり

痔で入院あくまで不粹ものの彼

いい体はたらく意志のない体

高槻市 傍島 静馬

雑魚取りのこんな流れを堰きあぐね

たまさかの早起きクラブの手入れなり

大阪府 谷沢 好祐

停年へ子は大学を言い出せず

ありそうでないのか給食費が遅れ

愛媛県 榎 紫光

見学で来れば工場もよいところ

云い張ってみた領収書見当らず

銀行へ護衛のような犬を連れ

ほんほんの宿題も見る女店員

青森市 工藤 甲吉

日本はどこか狂っているハダカ

ボス死んで妻というのが二人出る

政権争奪地球の青さなど知らず

人間国宝ミイラにでもするか

今日も汗して棺桶に近づくよ



ニア人に今宵も草は倒れるか

豊中市 林 夢 虹

労働者水こぼしこぼし飲む

情事倦怠コップの水のなまぬるし

大阪市 今 西 章 雅

貧しさが憎しみとなり李ライン

破調燦師の熱情の凝りに凝り

再審へ偽証にいきなり爆発す

鍵っ子知らずきれいな母の勤め先

どうせどうもならん政治に誰がした

引けとらぬ顔を集めてディスカッション

京都市 室井 八 九 寸

盛り塩は溶けて木屋町まだ明けず

生え抜きは銚のない町京にせず

岡山市 横 山 一 声

ワン公の予防注射も自家用車

夕立にバイクでさからって居る若さ

小松市 関 戸 宗 太 郎

葬式は代理ゴルフで優勝し

地盤もう荒しに来てゐる火事見舞

公約は秘書がつくってくれたメモ

石川県 高 山 涼 髪

貴金屬売場で談笑する身分

夕立がはれてきゅうりをきざむ音

どしゃ降りの名所の茶屋の酒うまし

妹のようにおもうとラブレター

魚屋の子のズボンにもうろこつき

美禰市 安 平 次 公 道

税吏異動投資が無駄になり

花一杯運動役所音頭を取っただけ

神仏への不信がつものる交通禍

人を信じたアシカ石を飲んで死に

原爆忌被災せぬのがいがみ合い

宇部市 平 田 実 男

責任のないのが結論出したがり

知れるのを計算匿名にして贈り

諫早市 川 岡 靈 眼 子

街の灯が見える吾家で値があがり

いろには墨痕淋漓とまで云へず

弟の角刈兄をてれさせる

電話口やっぱり正直者が負け

岸和田市内 藤 き さ 子

お化粧は出来ましたかと電気釜

あじさいの枯れゆくさまのいとかなし

気の弱い方がだまって罷めてゆき

駐在所みんなお留守でカンナの黄

母上のあつかい難うなり給い

青森県 木 村 涼 人

齡 さば読んで押し負けまいとする

新聞の誤植見つけた閑な店

ガスライター汚職が匂う小役人

帯に短く平理事をあてがわれ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

言い方もあろうに親の死に上手

満洲の没法子^{シツプワーズ}を重宝がり

兵庫県 遠 山 可 住

団体で来て混浴を独占し

金出来たナとブロックのかたつむり

甲斐性ないお人や自転車で廻り

拓け来てもうキリギリスの声がなし

姫路市 隠 岐 不 酔

賛成も気軽に言へぬ新議員

プール明け金槌組も式に居り

出雲市 中 川 晃 男

幽霊も着物脱ぎたい夜の暑さ

怪談は佳境ろうそく消えかゝり

覚めぬ子へ蚊張の片隅残される

うそまてその場の空気柔らげる



鳥取県 清水 一保

水不足に田植戦争まだつづき

早乙女の話題にもなる物価高

成績を叱れば親の子と答へ

真直に帰るにネオン邪魔になり

松江市 柳 楽 鶴 丸

ミミズ有ります都会では金になり

男性など眼中にないマネキン造る僕

京都市 都 倉 求 女

ボテボテのポリさんあれで犯人追えるかな

町へ来たもんしろ紙屑と紛れ舞い

銀行の冷房無表情を保つため

わが家さえ来なければよいアース

兵庫県 大江 秋月

上長のメモに見つけた酒の歌

パチンコにもはしごがあるか三四軒

大阪府 松 田 半月

片方の利かぬ足許地震ゆる

ふた親のわるいとこだけ似て生れ

今治市 越 智 一 水

ミロのピーナス展をみて

ピーナスをわからずほめるイヤリング

おちいさん田植ヘストッパかけて死に

竹原市 山内 静水

よくよくの事置薬妻が呑む

病床の妻へやっぱし女の子

父性愛妻から見れば冷たかり

私にも友あり世間おもしろし

新居浜市 小林 孝正

氣に染まぬ縁談テレビつけたまゝ

遺骸では喧嘩も出来ぬ友となり

イヤホーン一人くすくす笑ってる

同 舟 近 詠

今治市 長野 文庫

立志伝柳行季のあったころ

さる又に流行がある阿呆らしき

投書夫人小説夫人に志望変え

真相を知らず仲裁みそをつけ

和歌山市 秋月 宏方

食堂の見本を蠅が見て笑い

食うて寝て豚はどこまで楽天家

人生の本番おむつなども干し

学歴はないが家建て倉を建て

離婚離婚せねばスターでないみたい

ビニールハウス野菜も季節忘れかけ

大州市 米沢 曉明

緋の袴算盤おいている社務所

恵まれてねばりの効かぬ子に育て

ハンストの先きが見えない訳でなし

教わった道だけでない山の道

ボスの子が子供のボスになりすまし

会葬の末席にいてよくしゃべり

話好きうっかり極秘へふれていた

今治市 月原 宵明

猫の恋忍者の如く出没し

自転車へ西瓜がんにがらめなり

犬の舌三十五度へ処置が無し

犬連れた散歩に服の柄を撰り

海へ行くバス体臭にむせかえり

裸とは云わさぬだけの海水着

失業保険もろて悠々自適見せ

懐しい限りは寄席の下足札

名古屋市長谷川 鮮山

借りて貰う人も大事な銀行屋

明日と云う日はないと指揮きびし

風の来る向きたしかめて蚊遣香

エレベーター女の乳が胸へ来る



川傍柳初篇研究 (一八)

丸十府 高須啞三味
岡田甫 前田喜代人
○ 岡崎重義
清博美
川端柳風 藤井和雄

202 寄な事を言てハならす梓弓

一甫

藤井〓梓巫子、市子または県巫子、神降などともいう。文箱を仰向けにおき、それへ梓の木の弓をのせ、その弦をぶんぶん鳴らし「寄りくるや、寄りくるや」と死者の霊を呼び寄せる。多くゴマ塩髪のおそろしげな老婆であった。従って「寄な事」とは、人の世の言葉とも思えぬ変な言葉で、ものを言っているという事である。

高須〓藤井さんは、お若い方と思うが、よく市子の事を知っていられた。栃木県地方には、いまでもいるのかな？ ボクは、小学生時代、山梨県の奥地で、二、三度見た事があるが、この句の通り、全く奇妙な印象であったことを、おぼえている。

前田〓礎解に賛。——高須さん、藤井氏は明治三十六年生まれのだです。

岡崎〓賛。黒沢明監督の名作「羅生門」に、梓巫子が奉行所の庭で、梓弓を鳴らし

て、鬼気せまる神降しをするシーンがあったから、見た人は多いと思う。

丸〓賛。但し「ゴマ塩頭の恐ろしげな老婆」とは限らず、かたわら売笑をした若い女性もあったことは、岡田先生の「末摘花評釈」に例句をあげて解いていられる。

岡田〓同。但し、原句の「寄な事」は「寄な事」の宛字であることを、一言しておきたい。——なお、藤井氏が三十六年生まれなら、小生より二つ上だが、高須氏よりは九つ若いわけ。

203 おいてくんないどこのか海安寺

水砥

藤井〓「海安寺」は正しくは「海晏寺」で、品川にあり、建長三年海から獲った鯨の腹の中に、一体の観音像があったのを、鯨頭観音と称え、北条時頼が大覚禪師を開山として建立した寺だが、境内に楓の木多く、紅葉を賞でる人で賑わった。品川遊廓に近いため、吉原に近い下谷の正燈寺と同

正燈寺日暮を急ぐ紅葉なり(？)
清〓「おいてくんない」を「よしておくれ」という意味に使うかどうか、疑問。文獻ありや？

丸〓「おいてくれ、そんな見えすいたお世辞なぞ、こゝろ見えても、おれはな……」などと、今でも使うのではないか？ 「よしてくれ」と解してよいと思う。

岡田〓「おいてくれ」は、文獻など探がすまでもなく、今でも使用している言葉だが、そんなに諸君には耳遠いかな。

高須〓「おいてくれ」は、もとは「やめてくれ」から来た言葉で、丸先生の用例でも「冗談はおけ」というように使われるのではないかと。金田一先生(三省堂)の「明解古語辞典」には「置く(二) やめる」を重ねて意見は、おいてももらいましよう(「狂言・悪太郎」とある。その女性語化でよいのではないか。

204 そらを貳度見たが息子の落度也

梅枝

藤井〓「空を見る」とは月見のことで、吉原の十五夜と十三夜の二度の月見を、とどこおりに済ませた。そのため親仁の怒りを買ひ、やがて鈍子で配所の月を見る身となる。しかし、

後の月盃のない鈍子なり (傍五)
の、十五夜だけで勘当され、十三夜は鈍子ですのよりは、まだよい。とにかくののさまを二度請合って鈍子なり

と同意句。

川端〓吉原の紋日、八月十五日夜の月見と、九月十三日夜の後の月見。

高須「確解よし。『息子の落度』は『空を二度見た』ことだ、という言い方は、全く川柳的で面白い。佳句。

清「『空を二度見る』については、片月見を忌む習わしにまでふれなければ、説明不十分と思われるが、確解引用句の如く、勘当されるものもあれば

座しき牢あ、月われをほろぼせり

(タル一六)

という運命になる息子もあつたらう。

丸「確解に賛。この句では、特に片月見を忌む風習まで考える必要はあるまい。

岡田「同。高須説通り、二度の月見を『空を二度見た』と表現して、面白さの出した川柳である。

205 二度三度あしをはこんでやっともて

閑々

藤井「初会、裏、なじみと、三回目にやっともてタという句だが、それだけではつまらぬ句。この『あし』に『足』と『銭』即ち労力と金力と二つかけて、やっともてル身となつたと、しやれた句であらう。

高須「『足を運んで』は、やはり表面だけの意で『やっともて』に重点があるのだらう。吉原という所は、そういう所だという句だと思えばよい。

前田「賛。高須説通り『あし』は『足』だけで『銭』まで考える必要はない。

清「高須・前田説に賛。主題句をもう少し明からさきに、積極的にいえば

三会目ちつとは女郎買ったよう

(タル一七)

とならう。但し、女郎の方ではどなたへもこうしてあげる三会目

であるに過ぎまいが。

丸「賛。

岡田「諸説に尽きる。

206 ばっち／＼と屋根舟の静也

魚交

藤井「『屋根舟』は屋根をつけた小舟、納涼、花火見、花見、雪見と、大川に浮かべて遊んだもので『ばっち／＼』は、川水の舟ばたを叩く音。即ち三味の音もせず、たゞ水音だけという、静かな舟中の有様は、御想像に任すという所。船頭は気をきかして岸へか？ その頃は、大川の水も清澄だった。動中静がやがて静中動とならう。芝居ならゴーンと鐘が鳴る場面と見たい。

川端「雪見と見たい。周囲の静かな情景と、舟の中で差し向いで酒を飲んでいる男女の姿を、何となく思い浮かべる。

高須「屋形船の遊び説に賛。キレイな粋な遊びである。こういう場合の船頭というのは、ちょっとした板前なみで、トモへ火を置いて、燗をしたり何かしてくれ、障子の外にいて、決して邪魔にならなかつたと聞いている。

前田「『ばっち／＼』が、いろいろの情景を想像させるが、私はバクチの札の音を感じる。こんな句は、あまりこまかく考えず、各目の思いのままでよいと思う。

清「『ばっち／＼』は、三味線の音ではないか？ 粋でしんみりした高須さんの船遊び説に賛。

丸「『ばっち／＼』は、前田説のバクチで、めくり札を打つ音である。ひまでいる屋形にろくな事はなし

(タル二)

ばくちでもない屋根舟が気にかゝり

(タル一九)

は船頭が気を利かしている方だが、本句は明らかにバクチ。

岡田「感じなどでなく、主題句は明瞭にバクチの句で、船中でバクチをする句は、類句がたくさんある。

藤井「『ばっち／＼』を『打つ・買う・呑む』の『打つ』音とは気がつかず、下五の『静也』だけに、気をとられすぎた。207 じんじやうにおはきはい／＼が下女セツ

五扇

藤井「『はた餅』という所を、人なみに『お萩』などと言いながら、食べるとなると、七個もベロリと食べた、と下女を笑った句。はた餅はお多福・醜婦の悪口であるから、それを嫌ってお萩と言ったのか、ともかくはた餅がはた餅を七つ食べた、とおかしかつただけの句ではないか。

川端「『お萩』は、仏の命日などに作って、近所へ配ったりしたもの。ここでは、命日という雰囲気の中で、下女もお上品に『お萩』とは言ったものの、さて食べる時になるとつ／＼しみもなく七つも食べた、というおかしみの句。

高須「賛。上五に『尋常に』とおいたのが、この句を何となくおかしく感じさせているので、句意は平凡な凡句。

前田「諸説に賛。

お萩配って置きなよと二度目いひ

(タル一四)

丸「賛。

岡田「同。

208 鎌倉へよこ付ケにして三分也

五連

藤井「御承知の鎌倉松が岡へ、嫁を運んだカゴ屋の句だが、三分の駄賃とは、ふんだくったもの。——なお、馳込み寺の本堂は、いま横浜本牧の三溪園内にある。おついでの方、見ておかれたし。

川端「賛。

55 三分しよしめて鎌倉の戻り廻(4才) 高須「この上の句を、西原本では『鎌倉に』と誤校している。しかし、それで句意に違いがなかったからよいものの、全然違った句になったら、大変であった。

清「松ガ岡の句。三分といえは、一両の四分の三である。吉原の上妓が買った値段である。廻屋のふっかけてである。

丸「賛。

岡田「この三分は、松ガ岡の三年をきかせたもので、川柳の洒落である。まともに

品質優良

先カペン

TACHIKAWA PEN



タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

一両の四分の三とまで解する必要なし。――
 一なお、西原本の誤校を、高須さんが指摘したのは感心。その本は高須さんが編集された筈だから……。

高須「岡田先生へ――『日本名著全集』

第二十六巻「川柳雑俳集」は、ボクの作つたものであるが、ああいり刊行会の編集部員は、単なる進行係で、校閲者と印刷所の間に立って、両方の無理を聞き、どちらにもいいように滑らかに進行させるのが仕事で、校閲は終始校閲者任せ、原本などは遠く拜んだ程度。不審な点があつても、口を出すことも出来ない、校閲者第一主義（岩波でも然りと思う）だから、校閲は編集者には全然責任なく、後で西原氏からも訂正申し込みがあり、原版を訂正した箇所もあるが、訂正出来なかつた箇所もあるので、気のついた箇所を、ボクが時々本稿をかりて指摘している次第。今にして、心なく大変な仕事をしたものと思つてゐる。

209 大師から帰りに安い雛をかひ

門柳

藤井「江戸から川崎大師までは、今と違つて一寸した旅であつた。で、その帰りに品川で「疲れ休め」をして来る、という句であらう。品川は宿場だから、総じて吉原より安上がりであつた。それで「安い雛」と言つたものと思う。

川端「川崎大師は、俗に厄除大師と言われる。三月に川崎大師に参詣し、その帰りに安い雛を買つたという句が、遊女を雛に見立てた例はないようだ。ひよっと安い雛が目について買つた、いい父親である。

高須「川崎の帰りに雛を買つた」とい

うのが、何かクイズじみていた、ちょっとひっかかる。当時江戸と川崎の間に、何かそんな店のある所はなかつたか？ いずれにしても、そういう安物買いは、女性に限るから、女連の川崎詣りであらう。

前田「川端説に賛。」

大師から観音まではそうハなし

（タル二四）

で、遊んだのではなく、句面通りお雛様を買つたのであらう。

丸「賛。川崎大師の帰途、芝神明前あたりの雛店で、安物の雛を買つた、というだけのことである。

岡田「この安い雛を、何所で買つたかが疑問。俗に厄除大師といわれる川崎大師の縁日は、正月二十一日で、お雛様を買うのには、ちと早すぎる。或いは、大森の麦ワラ細工の店に、紙雛みたいなワラ細工の雛人形でもあつたかと、永らく文献を氣にかけているが、未だに見つからず、未考。（13才）

210 せんべいを下けてつづらの先キへ立

眠狐

川端「「せんべい」は、うどん粉に砂糖をまぜ、薄く延べて焼いた、一種の菓子。「つづら」は引越しの荷物でもあらうか。「引越しの後から娘猫を抱き」のように、真剣な大人と、無邪気な子供の組合わせ、それだけの句、と思うが……。

高須「それだけかな？ 何か、もっと意味のありそうな氣がするが……。

前田「私は、この句は「舌切雀」の句ではないかと思う。「つづら」は、もちろんお爺さんが貰つた軽いつづらで、「せんべ

い」は、雀が土産にくれたもの、それを雀が下げて先に立ち、爺さんはつづらを背負つて、雀の宿を出る、情景ではないかな。

藤井「「つづら」は、今ならさしずめ旅行トランク、行つた先々のラベルを、ベタベタと貼つて、得意の新婦朝紳士の如く、後に続く使用人に、そういうトランクを持たせ、自分は行つた町の名物煎餅を手に下げて、これ見よがしに得々と帰つて来た。

煎餅は、名物ではないとまずいから、江戸照降町の翁煎餅などは丁度いいのだが。丸「簡単な句だが、難句である。引越しとしては、特に「せんべい」と言つた意味が判らないし、旅帰としても、やはりそれがピンと来ない。些かムリ解だが、出替りの下女の句と、私は思う。「せんべい」はもちろんせんべいぶとんで、宿の者が誰かに、つづらに入れた荷物を持つて貰い、自分は薄い布団包みを下けて、その先に立つてゐる、と見たいが、下女奉公に布団まで持つて行つたか、どうか、その点に多少の不安も持つてゐる。

岡田「難解句だが、丸先生のせんべい布団説面白し。「絵本柳樽」の下女宿下りの画を見ると、小型の行李を背負つた男、或いは荷物を前後のカゴに入れた天びん棒をかついだ男が、供についてゐる。供の男は下女にふさわしく、若い衆でなく、中老以上の貧相な男だし、その荷物はごくわずかなもので、前のカゴには小さなタライなどの雑品、後のカゴは衣類の包か、行李などで、どうも布団らしいものは見えない。しかし、この句の「せんべい」は、菓子ではどうも納得できない。それで、私も布団説

を取りたいが、下女の荷の文獻が見あたらないのが、むしろ貧乏人の嫁入り風景とすれば、一応納得できるが、どうであらう。

211 そこまめが十三出来て縁がきれ

泉河

川端「松が岡縁切寺の句。十三は十三里にかけたもので、旅なれない女のこと、十三里の道程には、さぞ「そこまめ」が出来たことであらう。

高須「「そこまめ」が一里に一つずつ出来たか？ いやな句。

前田「140「十三本とうとう榎嫁はこし」の十三と同様常識的でつまらぬ句。

丸「「そこまめ」に、身にあまる長道中を利かせたものであらうが、いずれにしてもいやらしい、くだらぬ句。

岡田「底豆の十三は、十三里の道のりを暗示する、当時の作者の常套手段だが、つまらぬ句であることに間違ひなし。

212 傾城四五ふくて息子快氣する

秋紅

川端「「傾城」は遊女。長く待たされて機嫌を悪くしていた息子（遊客）も、指名の遊女が来て、煙草を四五服する間に、すっかり機嫌は直つた、という句。もちろん太鼓持ちの助言もあるだろうが……。

高須「暫間の助言まで考える必要はなからう。女郎が現われて、吸いつけ煙草を、四五回もらつただけで、息子は氣のむすほれが、すっかりとれた、それだけでよいのではないかな。

前田「快氣を、病氣の全快と考えると、この息子、例の労働だったのだが、傾城を四五回買つて、すっかり直つてしまつた、

と、いう句ではないか？

岡崎II賛。この息子、労咳だったのである。性欲抑圧、性的不満のために労咳になっていたのだから

男の労咳五丁で直すなり（安八桜I）のように、女郎買いが何よりの特効薬であるわけ。「四、五ふく」は、傾城が煙草をのむでなく、女郎を買う（登楼）ことで、それを葉の服用に見立てたのである。

清II前・岡両氏の説に賛。
四書五経読んでしまおうと息子死に

（筈II）
労咳を伊勢屋の息子病みはじめ

（筈II）
というような兆候を解決するために、女郎買いが礼賛され、またそれが当時の風潮でもあったのである。

傾城を買おうと男が生きて来る

（タルII）

といった句もある。

藤井II労咳を診断すると、男女ともホルモン蓄積が、発病の原因だから、その排泄剤として、男の場合は簡単に「傾城」という特効薬を買えた。だが、それも四、五服が適量という所で、余り連用してはいけないことになっている。この薬は、麻薬の一種で、中毒症にかかりやすい。特に帯妻してからは、用いてはならぬのに、以前服用の味が忘れられず、つい用いたくなる。故に四、五服で「快気」したら、後は用いぬよう、注意が肝要である。

丸II前田氏以後の説に賛。特に藤井国手の診断、面白く拝聴！

岡田II労咳説に賛。当時の「労咳」という病気は、結核性のもの他に、気ウツ症のプラプラ病も含めていた。思春期に多くおこる病気として、箱入娘の性制圧が

原因と考えられていた。男の場合は、きわめて少ないが、内気な箱入息子など、四、五回陽気な世界につれ出せば、気ウツなどたちまち全快してしまう。

213 どっこいといく／＼芭蕉貳三丁

一甫

川端II「奥の細道」のこと。紀行文だから、旅の宿々で二三丁ずつ書いただろう、との相像句で「どっこい」は、旅に疲れた身体なので、机の前に座るにも「どっこいしよと言ったであろうと、芭蕉翁を表現したものである。

高須IIいや「雪見に転ぶ所まで」どっこいしよ、どっこいしよと、歩いたであろう芭蕉翁を詠んだもので、
膝や手をはたいて翁一句よみ（天明）である。

前田II「どっこい／＼」と、二三丁行っでは休み休みする、芭蕉翁の、俳諧の呑気な旅を評した句であろう。

岡崎・清II「奥の細道」説に賛。

藤井II二三丁を買とするか、道のりと見るか、両説出たが、頁として「どっこいしよ」と、机の前に座るは無理。小生は距離とみるが、奥の細道の長途の旅行より、足元あぶない雪見の、高須説に賛。

転ばずば翁の雪見はてもなしが頭に浮かぶ。

丸II高須説に賛。下駄の歯に雪がたまつて、転げそうになる。「おっとどっこい、あぶないぞ／＼」と、転ぶ所までの芭蕉翁の雪見道中。

岡田II高須説通り雪見である。

214 四ツ目やハつけぬと浅黄じやうを張

五雀

川端II「四ツ目や」は、両国にあった性薬専門店。「浅黄」は、江戸勤番の田舎武

士。「じゃうを張」は、強情を張るで、長命丸は「つけぬ」と強情を張っている、という句である。実は、田舎者で、四ツ目屋が性薬であるという事は知らない。見栄を張る田舎侍をけなした句。

高須II浅黄裏（勤番侍）の強情ではあるが、長命丸ではなく、女悦丸であり、味な気になった女郎に「オヤ主さん、おかしなものを使ひなんしたネ」と言われ「とんでもない、某は何もせんゾ」と、白ばくれている情景と思う。

前田II高須説に賛。だが「四ツ目屋」と言えば、やはりその代名詞でもあった長命丸であろう。女悦丸も四ツ目屋の性薬であったが、使用法に少し手間がかかるから、浅黄の場合やはり長命丸がよからう。

（注）私は、戦前この種の薬店を経営していたから、専門店立場から、敢えて長命丸説をとる。（説明は省く）

岡崎II浅黄裏、アサハカにも相手の女郎を征服したい魂胆で、ひそかに長命丸を使つたが、香気が強いため、折角の深謀も、すぐ感づかれて挫折。

への句合わせて浅黄叱られる（末四）

ことになる。女郎としては、野暮客の浅黄裏などを相手に逐情したり、しかも長時間間床にいたりでは、実績をあげることも出来ないで、嫌だったのであるが、浅黄裏としては「そういうことはしていない」と、強情にトボケているのである。

清II賛。「女郎は、蠟丸、女悦丸のたぐいは嫌がるものなり、おして用いるとも、利かぬゆえに用いず」（三ツ組盆）とあるように、専門家は嫌った。

少しひりつくを承知で浅黄つけ（末二）とやったが、すぐにばれてしまった。浅黄はどこまでもヤボである。

藤井II川端説の「四ツ目屋を知らず、見栄を張る」のでなく、岡崎説の「使用しながらトボケている」ので「自分のは、ナマのままで、かくの如し」と、わが精の強いことを誇っている。すなわち、専門家に対して、素人が虚勢を張っている、面白さを詠んだものである。

丸II藤井説面白し、しかし「情を張り」には、自分の非を隠蔽する気持ちが含まれているのだから、四ツ目屋薬を使用しながら「使用していない」とムキになつてい、と解すべきであろう。

岡田II諸説に尽く。四ツ目屋薬は、実際に香気が強く、ひそかには使用できない。

輪講誤植訂正（一六）

12頁上段二行目「眠狐△ハ「眠狐」

〃下段三行目「眠狐△ハ「眠狐」

12頁三段最終行「位を興え△ハ「位を与え」

14頁三段十七行目「恥ずかし句△ハ「恥ずかし句」

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町 5 (361) 9373代

支局 東京都千代田区神田鍛冶町 2 (291) 9629代

名古屋市中区村田町 2 (88) 9069

蕪村 氣まま帖



東野 大八

私の親戚にちょっとばかり俳句をかじる老人がいる。六十の声をきいてから堂々たる俳句を定め、今年でどうやら十年選手というところ、失礼ながら大した句は作らないが、がんこな点は無類である。某日この人が「私は俳聖芭蕉をゼツタイと信じるが、貴下も同感だろうか」といった。その押しつけがましい点がカンに触ったので、私はへそを文字通りに押し曲げてしまった。「いや、芭蕉より蕪村の方が俳句はうまい」と言ってしまった。事実、昔から私は芭蕉より蕪村に傾倒しているのである。案の定、相手は眼をつりあげた。そこで私は傍証固めの意味で、及ぶ限りの蕪村のすべてをぶちまけていった。以下はそのときしやべった代物に若干肉付けをしたものだ。お笑い下さいませるな。

軍隊で一兵卒の私は洛陽攻略に参加したとき、洛陽郊外の図書館から十数冊の本を失敬。馬の背にそれを積んで、暇をみては眺めて歩いた。この本の一部は石原青竜刀さんに贈ってあげたことだが、最後まで残ったのが「劉苦禪画集」であった。表紙と五、六枚の画の複写だけで、かんじんの説明文が脱落していたため、この苦禪という画家の正体が今だにわからない。

いずれにしてもその絵なのだ、全部鳥（からす）の絵ばかりである。南画調のタッチで、墨筆で一氣に描きながったものだが、鳥は全部鮮やかなでに生きていた。ただカア／＼とばかり啼いていると思った連中が奔放無類ユーモラスなかに鬼気迫るその構図、表現様式の妙は私を完全にトリコにしまった。

その一枚一枚を私は今でも記憶しているが、私はこの鳥の生態から直ちに蕪村を想像した。この結びつきは今もってわからないが、思うに私のその潜在意識は、蕪村の句をギョ／＼とく眼玉の鳥の群の中に見出していたというわけだ。そのとき芭蕉をからかも感じなかった点、私自身はこの俳聖の上位に蕪村を置いていた心証に外ならぬ。

蕪村も絵を描く。俳句より絵の方が當時は世に通っていたのだが、これが蕪村の俳句の實力を相当弱めていたようである。画は南画風のものだ。

蕪村は芭蕉の百年あとに俳句を手がけ世に出したが、芭蕉がマンモス化し神仙級となっていたため、必然影が薄くなった。彼自身にすれば、芭蕉などモノの数ではない、と内心自慢まんまんだった節も感じられる。

彼は私の感覚からすると、その人となりは、正統派の落、ロマンチストで是非々の決断が腹の底までしみついていて、いうなれば、識見人格の素質が高いA級ジャナリストをほうふつさせる。私は短詩型の作家たるものは、一面ジャーナルチックな要素を必要とすることを昔から秘やかな持論としていたが、蕪村はどその適格者はいないかと考えている。

芭蕉にはいいパトロンと番頭がいた。だからふんだんに本も出せ、旅歩きもできたのである。弟子にも許六という無二の親友がいて、絶えず談酒のお相手を勤めてくれた。これにくらべて蕪村は孤獨で数えるほどの友しかいない。其角、鬼貫、嵐雪、と几童の数人、ぐらゐなもの、で、これとても師弟のチギリを結んだのは几童だけである。蕪村の夜半亭を踏襲した几童は蕪村が死後あまり気落ちしたのがたまたま数年を経ずして師のあとを追っている。蕪村の系脈はフワリとそれで切れてしまった。

蕪村は関西の出身で、享保元年天王寺蕪村で生れたので、俳号を蕪村としたが、彼はかぶらやネギ坊主が気に入っていたようで、手すきびにはよくそれを描いた。

蕪村の句には、夏の句が多く春がそれについていて、夏の句にみる活々とした積極性は、夏に関するかぎり芭蕉が逆立ちしても及ばない。

窓の灯の梢にのぼる若葉哉
時鳥平安城をすじかに
御手討の夫婦なりしを更衣
朝顔や一輪深き淵の色

蕪村の句にはとにかくスタミナがある。もつとも芭蕉のダイナミックな交響楽のせんにうつつに對し、蕪村はサロンミュージックの弦楽風な点が、俳句のジャンルにおいては極立つのだから、私は私なりにシンフォニーがもとより音楽の象徴ではあり得まいと言いつつ切りたいのである。

蕪村の人格のユニークさは、俗人の洒落っ気が多いことも私の魅力になつてゐる。彼は川柳の俳境もそらんじている。

酒を煮る家の女房よちとほれた
杜若べたりと薦のたれてける
蚊帖のうちに螢放してああ業や
化けそうな傘貸す寺の時雨かな

芭蕉が句の上での定めをきびしく弟子たちに教えたが、蕪村はそれに逆らうように妙きりんな句法を進んで用いた。彼も酒が好きで、酔余の戯作だという人もいるが、やけにきつちりして隙のない芭蕉に、蕪村は蕪村なりの反骨を示したと思われる。彼は芭蕉の評判があまり神がかりであるため、少々卑屈になつて時には「投げやり」の句も作つたようである。

蕪村の作句活動は宝暦時代が絶頂で、天明三年六十八歳で死んでいる。旅に出たのは奥州だけだが、芭蕉にてらうのを嫌ったのか、何も書いていない。

蕪村の少年時代は徂徠の漢學と真淵の和歌が盛んであったが、彼は漢學を学んだものの、漢語を俳句によく用いたものの、漢學のムードはまったく取り入れなかった。また真淵派の和歌の大流行も俳句を知らぬも甚だしいとむしろ潔癖に背を向けていたのではあるまいか。もつとも漢詩は芭蕉同様李杜の心を愛し、和歌は俳句に五七五調の格調に比益すること多大だったところで、蕪村の破調句はこういうところから生れたようだ。

蕪村はまた妖奇を愛した。「聊寄志異」を著した蒲松齡の時世へのレジスタンスが、知的詩境を神仙にこよせたといわれているが、蕪村もそういう境地にもたつていたようである。私は蕪村の怪異句が大好きである。

公達に狐はけたり春の宵
友秋や狐のかねわ小百姓
戸をたたく狸と秋を惜しみけり
小狐のなんにむせけん小萩原
草枯れて狐の飛脚通りけり
春雨や人住みて煙壁を渡る

蕪村の俳友には鬼貫がいた。破れ畳にはかり、売りの酒をくんで、新酒の味をかみしめた。

鬼貫や新酒の中の貧に処す

この鬼貫との酒の上の話には、当然大先覺芭蕉が登場し、大いに二人してその句作を論じ合ったことであろうが、要するに蕪村以前にいた芭蕉は、あまりにも「巨人」であり「俳聖」でありすぎた。このことが、蕪村の価値を後世に至るまでその俳名を低からしめたのである。



煤

北川 春 巢

目にすすもはいらず山陽線の旅

広島原爆記念日も近い今年のある日、私は休暇をとって郷里広島へ旅に出た。思えば数年ぶりの墓参である。赤ん坊の時には連れて行ったことはあるが、物心ついた時は戦争で、その後は一度も故郷の土を踏んだことがない長女も、勤め先から休暇をとって同道した。「びんご一考」という大阪仕立ての準急電車で、旅は誠に快適、天気は快晴で暑い、窓からは涼しい風が吹き込んで来る。そこで右のような句が浮んだ。

夏山陽線を行く度に思い出すのは、広島へ召集された頃のことである。召集は敗戦の年、昭和二十年の六月十八日だった。召集されて暑い中を、あちこち部隊と共に移動した。広島から山口県と共に出た。山口県から秋穂へ、秋穂から次は同じく山口県と共に出た。大阪の天神祭の日であった。敗戦も真近だったわけだが、そんなことは我々しじもの者は知る由も

なく、張切って徒歩で中国山脈を越えたのであった。峠の上から見下ろすと、部隊は延々と続いて来る。天神祭のお渡りの行列みたいやない、としみじみ思ったのを覚えている。

村へはいること、村の人人の歓迎を受け、水のこの馳走になったりしたものだ。軍医見習士官であった私は、自分で荷物を持たなかったが、自分の体は動かさねばならない。背中から一面汗ビッシリだった。行軍の汗を鏡後に見てもらい

春 巢

敗戦の報を聞いたのはこの人丸においてであり、広島原爆の報は翌翌日、八日付の新聞に、特殊爆弾ということで報道されているのを読んだ。我が部隊は、山陰線海岸における敵の上陸を阻止する目的の部隊であったが、終戦後は全く仕事がなく、九月の初めには人丸を引払って、広島と呉との中間にある海田市という所へ引き上げて来た。ここでもまた集結していると

春 巢

いうだけで、特別の任務はなかった。広島原爆の跡をただ「見物」に行くくらいで、その取り片付けなども命ぜられることはなかった。私はその頃鉄道病院に勤めていた。鉄道の全線通用パスを持っていた。仕事がないまま、そのパスを利用して海田市から当時疎開先の滋賀県貴生川の家まで時時帰って来た。普通では汽車の乗車券は中買えない時代であった。子供が「病氣」になったりして、休暇をもらうのであった。その時に走ったのがこの山陽線であることはいまでもない。客車は満員なので、貨物車の隅に腰を下ろして夜行で帰宅したことも一再ではなかった。貨物車へは、特にトンネル内では汽車の吐き出す煙がはいりこんで来て、目も口も開けてはいられなかった。そんなことが何となく思い出されたのも、右の句ができた一因であらう。

春 巢

もうひとつ汽車の煙で思い出すのは、召集解除になってから、家のある貴生川から大阪の鉄道病院へ通勤していたある日のことである。これは山陽線ではなくて東海線であるが、私は病院から家への帰途にあり、汽車は石山駅を出て草津に向って進行中であつた。石炭が悪いせい、当時は車の中へいくらでもすが舞いこんだ。私は多くの場合、汽車に乗ると目を閉じてなるべく精神を休めるようにしている。前にも座った。百鬼風の男がしきりに目をこすつてくる。一当時は百姓の景気はすこぶるよく、百円札か十円札かの「大祝い」などという言葉もよく聞かれ、私たち疎開者は、そんな百姓に對して余りよい感じは持っていなかった。その男の目につくすすもは、やめ、しばらくするとまたこすす。たいへん困っている様子であつた。目にはいつたすすなどは、大いにははっておいでも出るのだから、余り目をこすすし、またかえって出る筈のすすを出なくすることもあるものである。

春 巢

見ていて余り気の毒なので「取って上げましょうか」と私は声をかけた。いらぬ親切心を出したものである。あるいは人の病苦は見ておれない、という医者の素質が出たのかも知れない。とにかくその時の私の心理状態は今でも思い出すことができない。その男は素直に目を差し出した。眼科の医者がやるように目をちよっと引っくり返せば（これが素人にはむずかしいのだが）すすのある場所は大きくすすは取れているのだ。あっさりといきまけてしまった。もう一度目をしはたいて、その男のいったことがふるっていった。

春 巢

「衛生兵でもしておられたのですか？」

春 巢

大博士をつかまえて、（もっともその頃はまだ小博士だったかも知れぬが）衛生兵とは何たることか。私は苦笑を禁じることができなかつた。前に「取って上げましょうか」と声を掛けた時の心理は思い出すことができないが、「衛生兵だったのですか」といわれた時の気持は、今でも忘れることができない。

春 巢

山陽線の準急電車で走りながら、今やすすもはいらぬ快適さを味わって、私はこれらのことも思い出した。これも右の句が浮んだ一因である。

春 巢

私の郷里は、尾道駅で汽船に乗り換えて約二時間半の距離にある小島なのだが、その汽船も最近に進水したという豪華な観光船であつたという幸運であつた。故郷の家で、海を渡って来る風の涼しさは格別ここに居ると泳ぎたいという気持などとも起こらぬくらいである。長女はそれでも墓参の後しばらくの水泳を楽しんだのだが……。

春 巢

この島は瀬戸内海国立公園の中にあり、ご多聞に漏れずみかんの島である、同じ郷里ならみかんの花の咲く頃か、みかんの実の色付く頃があるいは夏がよい、とよく聞かされている。魚は島のことであるから、いつも新鮮で味も全くすばらしい。その夏に帰郷して来て、実に楽しい旅であつた。極楽島へ来たといつても過言ではあるまいと思つたことである。夏の極楽見て来て秋もまた来た

春 巢

心斎橋筋大丸前
電話四三三四番



五世川柳 その句(一)

阿達義雄

(一) 個の雑詠

個の雑吟の代表句を抜いて其の傾向を検討してみるに、表現に意を注いでいる点は見られるものの、現実を生き／＼と描写したり、人情の機微を穿つなどということが稀である。これは一つには、彼の御世謳歌と道義尊重の精神に禍されているものとも考えられる。

○乳貰ひの帰りは夢を抱いて来る

(七五・8)

右の句は個の句の中でも佳句に属するものであり、乳を飲ませて貰った赤ん坊のすやすや眠ったのを、その父親が今は安らぎの心で抱いて帰るというのであらう。赤ん坊を抱くと言わないで、「夢を抱く」といった点が技巧的な処と考えられるが、これは乳貰ひの最上のコンディションを狙ったために人々に、微笑を催させても、乳貰ひの微妙な心境や生活苦が閑却されて了っている。右と比較のための他の乳貰ひの句を示してみよう、

●乳貰ひあつちの子をば重たがり

●乳貰ひの袖につつばる鯉節(初・11)

●乳貰ひはがっかりとして花見かへ

●乳貰ひに人の男のむごい事(九・25)

●乳貰ひへ気の毒をうに芝居也

●乳貰ひの窺いて帰る新夫婦

●草をわけてせんぎされてるきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

●おさへればすすきはなせばきりぎりす

○二度礼を言って石臼返すなり

○句は面白い狙いの句であるが、その発見を言葉にしてみただけで、矢張り描写を交じえた初代川柳時代の次の句には及ばない。

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○白の礼袖と帯をはたくなり

○蒼海を蔵へ詰めてる塩問屋

○渡し場へ来て急用の中たるみ

○如何にも考えて作った句という趣がある。

○又たのしからずや床へ一ト鈍子

○ゆく水の流れは絶えず米を呑き

○神主は人たまの蠅を追ひ、

○田のくろを譲って通すこやしの荷

○表現のために表現に工夫した結果、次の様な句が生まれるようになった。

○羽二重も細細となる老の肌

○ぶらついて岩茸取は精を出し

○最後に代表句として抜いた残余の句を附記すると、

○楽屋では御台所も茶わん酒

○鯉の寄又死にたいと礼に来る

○出る月も入る月もある水車

○遊里吟(場所と来往)

○個の句には遊里吟と詠史吟が特に多く、これらは狂句時代の「柳多留」の句風を示しているものとも考えられるので、先ず遊

里吟に當つてみることにする。

第一にその場を中心として詠んだものでも

○一ト目千金吉野より花の江戸

(七四・4)

の句は必ずしも吉原の句とは言われな

○恋無常中の仕切に土手一つ

(七一・29)

右は日本堤の土手八丁を仕切りとして、左手に吉原があり、右手の山谷に寺院の多くあったことを言つたものであろう。更に、廊内に美形が揃っていることを、

○別世界中に夜光の玉揃ひ(一六二・25)

○下和見よ廊は夜光の玉揃ひ

(一〇七・26)

と、遊里吟にまで支那の夜光の玉や下和を持ち込んでいるのは、この時代の風潮と細の句風を語っている。

ただ、細は何の見栄えのしない廊の景を、右の不夜城の美景に對し、

○廊の景錦の裏に異ならず

(九八・57)

○見栄えせぬ藤棚の上廊の景

(一五四・28)

という風な譬喩を以て表現している。

廊の花と言つても色々で、一枚一分とする小菊の繻頭も花と呼ばれ、

○仙境は小菊の花の値が一步

(二二・13)

又、吉原の桜も花であるが、

○吉野は物かは吉原の夕桜

(七七・1)

○夕越えて曲輪へ八重の桜發

○夢苦海花も楽しむものにせず (一一五・33)

○月花もよほど苦になる花の廊 (九三・9)

○さと馴れて来ると桜はひんぬかれ (九三・16)

○華魁その者も遊客の眼には仲之町の桜と同様に花と映じもしよう。ただ、花見につけ、月見につけ、廊の紋日ともなれば、紋日を済ますため客にその費用の調達が無心もせねばならず、妓としては苦の種でもあった。

最後の句は、仲之町の桜と言っても、生え抜きの樹ではなかったことを言つたものである。月見に賑うのは深川仲町も同様で、

○仲秋の群集仲町仲の町 (七二・2)

と詠まれており、これは「仲」の字の頭韻を狙つた句の様である。

細の句の中に見える猪牙舟を見るに、

○頭北西面猪牙に寝て堀へ付け (八九・30)

○猪牙に酔ひいやはや金を溜める筈 (七五・33)

○急かすば乗らざらましを冬の猪牙 (九一・42)

○十返りも見ると不首尾の松となり (二二・30)

甲句の「頭北西面」は仏教関係の語、丙句・丁句はそれぞれ有名な和歌の文句を綴つたものである。

吉原通いには、右の様に猪牙で行く者の外に、浅草寺失大臣門の辺から日本堤迄の

馬道から行く者、日本堤の土手八丁を四ツ手廻で飛ばす者、裏道の浅草中田圃から行く者など様々であったが、いずれも衣紋坂から大門を潜って行かなければならなかった。これらの来往の様を細の句によってみると、

○馬道で智只一騎引きかへし (七九・1)

○餅をねだつた例のない四ツ手廻 (八一・19)

○狐に化かされ中田圃度々通り (九二・5)

○歸りにはいらぬ地名の衣紋坂 (一一二・8)

○馬も夜遊び廊近き霊地也 (一二八・26)

最後の「馬の夜遊び」については、何か伝説でもあったのであろう。その他、甲句の「馬道」と「一騎」は縁語、乙句の「餅をねだつた例がない」とはいつも酒手をねだることを裏から言つたもの、丙句の狐の語には遊女の意味も含まれており、丁句は、歸りには衣紋をつくろうが必要がないからである。

なお、妓樓の屋根の様を、

○濡れる廊ずらりと屋根へ水を置き (九一・42)

と、「濡れる」に水に濡れることと、色事の濡れの両義に掛けて詠んでおり、妓樓で商売繁昌を祈って祀つてある金勢神の句は、歌人藤原実方の名を利用して、汁を隠語的に詠んだ破礼句であつて、

○金勢太トしく実方に汁が出来 (九六・11)

文政・天保期の破礼句には、この様な嘲罵的な表現が多い。

然し、次の句は、苦界十年の年季を明けた遊女が廊内の九郎助稻荷に礼参りをしたというだけの句であらう。

○九郎助へ礼参りする二十七 (一一九・13)

細が吉原への地名・道程を詠んだ句は右の様であり、深川大新地にあった呼出し茶屋の百歩楼や同じ岡場所の裾纏を句にしたものは、

○けちな奴ッ裾纏でさへほろを出し (一四五・24)

○鳴がくれゆく舟を見る百歩楼 (七二・23)

甲句は「裾纏」の地名を「ほろ」の縁語とし、乙句は、細島を念頭に、柿本人麿の「はのは」と明石の浦の朝霧に島かくれ行く舟をこそ思ふ」という歌の文句取りの句となっている。

なお、陰間茶屋のあった芳町と又で有名な小網町の釜屋治左衛門店とを

○繁昌釜屋芳町小網町 (七三・11)

男色の「おかま」と屋号の釜と取り合わせて詠んでいる。

柳橋の料理屋万八(よろづ屋八郎兵衛)は新島越にあって八百善に近いというので、

○嘘の近所に八百の料理茶屋 (七二・23)

と詠んだのも万八(嘘)を嘘八百に利かせた句であるから略同趣向の句と言つてよからう。

要するに、佃の遊里地名吟を見ると、僅かな例外を除けば、縁語掛詞を利用した句や、成句、古典の文句を綴った句が多く、内容よりも言語表現の遊戯を狙っていることが知られる。

(三) 遊里吟 — 遊客 —

佃の遊里吟を遊客の方面から眺めてみると、先ず戒瑠の笠を被って春日野の所へ通った尾張侯宗春と伽羅の下駄を履いて高尾の所へ通い詰めた仙台侯伊達綱宗が対照的に詠まれ、

○戒瑠と伽羅は榮華の香冠（七二・24）

とあり、なお、仙台侯を、

○太守でも傾く城は落しかね（九六・27）

○太守のむつごとおいらんに上ゲすまれ（九七・25）

○民の竈を匂はせる御放埒（一一〇・35）

と詠み、傾城を強いて「傾く城」と言ったり、太守だから「さげすむ」のでなく「上げすむ」のだという言語遊戯を以てしており、最後の句は伽羅の下駄を貰った豆腐屋を暗示したものである。

医者と見せかけて遊里に行く憎のことを、

○臨機応変御医者也和尚也（六九・10）

と、臨機応変の語で片付けている。

この様な語気は、ただ見物して帰る素見にも用いられ、素見物は即ち女郎の素実見だとし、

○首実見て凱陣と素見洒落れ（一五七・6）

「首実見て凱陣」するのだと洒落れさせているが

○怒ったり且つ案じたり親父待ち（七五・37）

○居続けの討手残らず深手也（七八・4）

○居つづけにいい説客も返り忠（七八・8）

○北敵に裏切りこいつ卑怯者（七八・14）

○さすらへは息子讒は重モ手代（八七・36）

○南一の遊びはせり夜半の雪（一一九・17）

○もてたのも是也とはせず紋日前（一五四・10）

○科ガの次第を言ひ聞けてから振袖（一五六・3）

○味はへは香美ならず式朱の台（一五七・10）

などの句の表現も皆趣きを等しくしており、当時の読書子の口吻を身上とした句であって、それなればこそ、

○息子博学細見に註を入れ（九〇・41）

という様な見立て句も出てくるのである。この読書子の口吻は国文調の句に於ても同様であって、

○とさまこうさまたゆたいて筆掃り（九〇・24）

○おしてるやなにはともあれきつい癪（八四・32）

後の句の様に敵嫌の癪を押させられていることを、「おしてるやなには」枕詞に掛けたものに迄も発展させている。

又、この反面として、激した話語をその儘句としたものは、野暮の言動を写し、

○癪を押せとは過言なり身共武士（九〇・8）

○ヤイ喜助身は字番に來はせぬぞ（七五・37）

次の句の「連の根を掘られ」は連のある不忍池の出合茶屋へ行ったことを問いつめられたことを暗示したものであり、

○代参の不首尾は連の根を掘られ（八一・1）

又、「虫の根を切る」は好ましからぬ遊客との關係を断つことに掛けて言ったもので、

○命へ灸は虫の根を切る仕かけ（一〇七・29）

いずれも、或る事象を暗喩的に表現しただけで、現実性具象性が反って打消されている。なお、佃の破礼句としては、

○芋を喰ひ陰間部屋で叱られる（七五・9）

○裏門に鎖を立てるけちな晩（一四一・19）

右によっても大体知られ、これ等はまた文政天保期の破礼句の傾向と見てもよからう。

その他、佃の縁語掛詞の句としては、

○蒸籠騒ぎ惣座中餅につき（九九・102）

○傾城にかかれ番頭筆をまげ（一〇二・7）

○ふられる前表鈴のなる頃上り（一〇七・3）

○居続けの軒に氷柱も延びてゐる（一〇七・28）

などがあり、右の傍線と二重傍線の語は縁語となつていただけでなく、二重傍線の語には二つの意味が持たされている。

佃の句で、右以外の普通の句としては次の様なものが挙げられる。

○素式朱持ち十二町はど見てあるき（七二・23）

○女房の吟味もされて初会もて（七三・13）

○住所の吟味もての初会也（八九・10）

○夜具の客まづ呉服屋でもてる也（九六・4）

○傾城につめられ親仁にはふたれ（八八・10）

○母も味方に付き兼ねる冒婦り（九七・25）

○朝帰り味方と思ふ母は癪（一〇六・38）

○はし入りをひけに買つても金がいり（八七・23）

○いきな牢見舞最中や甘露梅（一二〇・23）

——筆者・新潟大学教授——

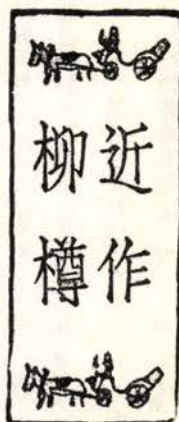
色紙短冊

書画用 口冊

大坂戎ざし

丹青堂

電中セニ・セニ



麻生路郎選

北川春巢選

山の湯の雨のんのんと酒になり 仙台市

軽部日東里

若夫婦即かず離れず 畑を打ち

同

役人の古手器用に猪口を受け

同

その先は余韻眼と眼で事が足り

同

坐つてだけの芸者が管を巻き

同

旧道へ家並頑固にし がみつ

同

真情を吐露して腹を見すかされ

同

近頃の針はと母は眼を云わず 新製市

安藤 桂仙

美しき月を刑事はもてあまし

同

老夫婦蚤をつまんだまま話し

同

夏虫になとえなろうと老らくの

同

商魂は酔うても名刺だけはだし

同

きざな奴来たなど煙草はいとなげ

同

居眠りも守衛は年季かけており

同

人を呼ぶに明治の人は手を叩き 仙台市

平野 光道

コンバクトに女冷静とりもどし
初任給の高い方へ中卒買われゆき

同

米転を借りある人に見送られ

同

何か足らぬ積木こんども未完成

同

鍵っ子もなれず老呆けた祖母がいる

同

金詰まりか工場用地に夏の草

同

ボーリングをしても妓散る風情 倉敷市

水谷 谷水

下座から上座へ坐ったまま押され

同

片意地な後家で話がまとまらず

同

父の日はこんなないても忘れられ

同

でも汗がひきましたわと個展出て

同

妻の留守捕鼠器のイモもあらびて

同

法事もう後家の身内顔みせず

同

共稼ぎ申合せて何輻目 鳥取県

鈴木村諷子

人間をほめられてよう金貯めず

同

車窓から水田加減も見て戻り

同

大砂丘蚤一匹を跳ばしとき

同

看護婦を叱りとばせる程に癒え

同

嘘の世にたぬき寝入りを装わん

同

俄雨又張り替えるくもの糸 玉野市

小谷 仙山

夫の手借りてふくれる毛糸玉

同

五輪音頭孫に教えて孫の守

同

あやめ切る幸せしかと花鉄み

同

短詩型文学の

将来性

八木摩太郎



ミコヤン・ソ連第一副首相が訪日議員団の団長として来日して、その例、早稲田の記念会場で一万二千の学徒に向かつて講演された講演の一節に、

「ごく最近、ソ連に於いては、世界の詩という、シリーズで芭蕉の詩が一万部発行され、たちまち売り切れたとの事、なお現在、日本の詩をもとにして、歌を作っているもの、作曲家が五名もおります」云々と話された。これは、ただにソ連のみではない。欧米でも近頃日本文学の翻訳は、一種の流行であるこれは我々日本人として、また短詩文学に、たずさわるものとして大なる喜びであると共に、詩壇の前向き姿勢の進歩でもある。

かつて、松尾芭蕉が、「百修九竅の中に物有り、かりに名付けて風羅坊という。誠にうすものの風に破れやすからん事をいうにやあらん。かれ狂句を好むこと久し、終に生涯のはかりごととなす。ある時は徳んで放擲せん事をおもひ、ある時はすすんで人に勝たん事をほこり、是非胸中にたたかうて是が為に身安らず。しば



押ビンの務は人の力借り

同

人生の一駒株の値が下り

同

B Gの夢に見ているシンデレラ 竹原市

杉原 愛鳩

屋根裏の間借りで夢がある若さ

同

冷房暖房からだきたえる事忘れ

同

魚屋に惜しい弁舌もっている

同

神輿練り停年がありわびしけれ

同

職人を知ったかぶりがおこらせる

同

パトロール鹿にも何か言うて行き 奈良市

村上 春己

現実に戻ればサンマの臭いする

同

停年がデモ行進の列にあい

同

一億もいるんだどんな奴もいる

同

人の子の親として募金箱をもち

同

換気扇素通りさせぬ焼鳥や

阿部 良江

愛情がさめて無趣味が鼻につき 岡山県

同

良い縁を祈って娘二十六

同

窓の出た嫁に世帯はまかせきり

同

右側を歩くと手を引く子が教へ

同

百姓の欲がよそ目に美はしく

同

無精髭異性の方へ尻を向け

須藤 俊江

支那服の割目みている空返事 高知市

同

学あるとこ見るとすれば舌をかみ

同

遮断機が下りて運転手の煙草

同

尾行者も遮断機命がけで抜け

同

脱いだものの壁へズラリと一間ぎり 大阪市

山田 李鳥

倦怠期寝間香水も忘れがち

同

今更に位牌へ両手おそすぎる

同

盛装の女正面切って行く

同

まともだと金も使うに惜しくなり

同

京都着まだ大阪へ酒が要り 枚方市

宮川 珠笑

妻の肩ほぐしへソクリ打診する

同

テレビ見る絶好の位置妊婦占め

同

交番の時計止っている平和

同

土産買う仕事残して旅終る

同

紙コップ二夫にまみえぬ生れつき 京都府

大久保 和二郎

さよならののならのしめりがあとをひき

同

新年と暑中に無事を知るはがき

同

保険屋とわかってからの受け答え

同

心頭を滅却さして子対す

同

療養の孤独面会母ばかり 大田市

半田 夏生

浮気するどころか我身守りかね

同

亀で行く筈のテンポがまた狂い

同

やり甲斐の仕事へ休ついて来ず

同

云う程に仕事も出来ず又寝込み

同

らく身立てん事をねがえども、これが為にさえなられ、暫らく学んで愚を曉らん事をおもえども、是が為に破られ、ついに無能無芸にして只此一筋に繋がる。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがいて四時を友と見る処花にあらずという事なし。おもふ所月にあらずという事なし。像花にあらずる時は夷狄にひとし心花にあらずる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがいて造花にかえれとなり。」これは、芭蕉の「笈の小文」で、芭蕉の俳論芸術論、を云々する際必ず引用される文であるが、此の一筋に繋がる、其の貫道する物は一なりと言う芭蕉の根本精神があったればこそ、外国の人々に

味のこーと

モダン 川柳

心齋橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL 0466 6684

御集会には階上を御利用下さい





盛装を脱げば片肺だけの胸	同	池の青恋しい人がな お恋し	大阪市	林 緋砂子
生きて行く術に装う事も又	同	石庭のはきめに波をただよわせ	同	同
愛の表情にボーカルフエイスもあり	同	冷房がとまり人間性見られ	同	同
母さんの匂いサンプルだけで消え	香川県	呼鈴を仕掛けて無事な金庫番	八代市	永松 道雄
嫁としてマイナスP・T・A幹事	同	たくましい海女筋金の曲線美	同	同
アクセサリーみんな愛はにせ	同	春夏秋冬ビール供える喉仏	兵庫県	同
浴びるよに飲んで自虐を繰返し	同	水澄んで故郷はすでに老化する	同	常岡 孝風
敗れても芝居気のある手を握り	玉島市	恋の掌に砂美しき詩情持つ	同	同
紫陽花が開きジュース茶が入り	同	ふり返える影もやっぱり貧しけれ	同	同
四方山の話土産がほっとかれ	同	親の顔立てた見合が縁となり	堺市	青山慶之助
参観日父さん組ははみ出され	同	運転が出来れば要らぬ用もふえ	同	同
台風で工事の手抜き知れずすみ	兵庫県	貰うまじとカンパをはずむパパ	同	同
早乙女は名のみ婆さん勢ぞろい	同	ボーナスは握手を三ツしてもどり	青森県	岩淵 一星
老眼鏡つるの折れたものおしてみ	同	湯治から失保悠々もらいに出	同	同
農地報償鳴りもの入りで消えゆき	同	特売場以下同文の客ばかり	同	同
定退の未だ働ける力こぶ	金沢市	犯人割った指紋係へ記者は来ず	富田林市	同
百姓が好きと今時けなげな娘	同	人間が死んで事故一件と書く仕事	同	同
ばた屋にも縄張りがあるせわが	同	ヴィーナスに臍のあつたを見て帰り	同	同
最後にはパパが負けとくヒスの妻	同	人真似が上手で一向出世せず	見島市	伊丹柳瓢子
鏡台へ結び文して務めに	高槻市	反対を押切る若さうらやまれ	同	同
女とは着物一枚買おて悔い	同	下手な祝辞止めるころが見つからず	同	同
夫から先手うたれた甘えよう	同	お隣がステレオを買いうちがもめ	大阪府	井上美恵子

肩こり・神経痛
筋肉痛・腰痛
疲れ目・便秘に
●アリナミン
●鎮痛性アリナミンF

「アリナミン」の活性特製型ビタミン

疲れアリナミン

も、弘く芭蕉の詩が印刷されて読まれるのであると思う。

総じて、和歌、連歌が「雅」の世界に止まったのに対して、前人未踏の「俗」の世界に詩を求めんとするのが俳諧であった。この俳諧から俳句と川柳とが生まれ、俳句の「花鳥風月」に対して、「人間風物」の川柳が確立した。しかも、「俗」の世界に詩を求めるといふことは誠に困難なる業であつて、殊に川柳は、大衆詩でもあり、批判詩でもあるので、早くから口語を以て大衆の苗床から育くまれ、大衆に依つて親しまれた。初代川柳の選ぶところ、そこには十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型が生まれ、含みのある日本固有の言葉の味に依つて盛られた、滑稽・皮肉等川柳で無ければ、味わぬ感興、——川柳味が現出した。しかも、日本古来からの歌謡を継承する定型の十七音字が尊重

行く先に知らず観光バスが知る 今治市 八塚三五郎
 地方色求めてコケシ一個買い 同
 シジミ貝哀れ小さく喰べられる 出雲市 和泉 松風
 体操を進める妻の愛嬉し 同
 つつがなく帰れと子等の靴みがく 大坂市 福富 隆子
 停年がせまり夫婦でくそ度胸 同
 おなら一発これから今日が始る 大坂市 宮尾あいき
 宣伝用の風を流して電機店 同
 内孫は怒り外孫見て笑う 松山市 河本南牛史
 倅は還暦叱る親があり 同
 同窓会ポストつくまでご遠慮 大坂市 山地 判志
 結構な傘も要らない道を選び 河内長野市 森本黒天子
 民謡をおどる老婆の顔のつや 神戸市 友国 ゑつ
 お手伝い床敷く間もテレビ要る 大坂市 和田 旋鳳
 アルバイト親の仕事は手伝わず 羽咋市 三宅 ろ亭
 水不足やと植えたら水冠り 笠岡市 谷本鈍愚坊
 傘持つて行きやと女房味気ない 羽曳野市 新免 則子
 梅雨晴だそろ／＼和尚胸毛出し 京都府 西村句楽坊
 ブラジルの土に船出は厳しすぎ 羽曳野市 杉本 胡人
 結婚一年ベターハーフも板につき 岡山県 中柄のぶ子
 打ちたいな禿げた頭にのった蠅 奈良県 木村よしを

◇男女の交情には、暴から欲に次に情と移って行くらしい。川柳作句にもこの三段階がある様に思える。

奇抜・優艶・清楚・思い出と川柳人の有情無情の心を秘めた

川柳ゆかた会

川
雑

1964・8・9

於 大阪府信用金庫会館

句会場の(一部)(上)と懇親宴の一部(下)



栄えある優勝楯は篠山支部が永久保持 不朽洞杯(席・兼題の天の天)は本多清人氏に

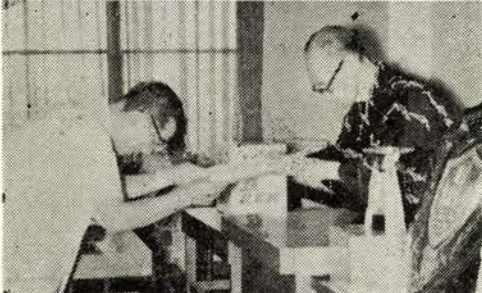
待ちに待たれた八月九日、ここ天王寺は、七百有余年の昔「契あればなにはの里にやどりきてなみの入日を拝みけるかな」の天賦の詩人、藤原家隆卿の隠棲の地——夕陽丘——文化センター街に聳ゆる府立信用金庫会館は、うだる酷暑の暑さも知らぬ冷房完備の会場いっぱい、気軽に、うちくつうちくつ、爆笑の中に、さらさらとう句箋の走る川柳人集いの場となった。受付、会計、接待、会場の各係もいつもと打って変り軽装な浴

衣姿の常任理事が、こまめに動くサービス振りに、東京、島根、を初め、岡山、篠山の遠来の集团的参加の人々も、一寸ドギモを抜かれた異状な句会風景だった。続々つめかける新鋭、古豪の人々も開会前、既に会場満員の盛況振り。ゆかた着の今日は、家庭的な雰囲気のみならず、女性川柳家の顔もいやが上に美しい。受付で渡される雅号の胸に飾るナンバー札は、本日の呼びびもので、一番素晴らしい浴衣をお召しの方に呈賞のコンク

ル番号で、われらの師ご夫妻は、「番外」と言うナンバー札で、親近感を一層覚えさされる浴衣姿のすがすがしさは、阿波踊以来の久しぶりでもある。午後一時過ぎ開会の幕は切って降ろされた。司会は、西田柳安子氏、開会の辞は、お馴染みの毎日放送の社友の岩崎愛二氏。拍手裡に壇上に立たれた同氏は、私はユカタ、コンクリルのチャンピオンとして立候補のため演壇に立ったのではない、と、会場を笑わすユーモア、次で本社副主幹北川春葉氏の挨拶は、「恒例の川柳まつりは、昭和二十八年路郎先生の誕生日を祝福するため、句集「旅人」の出版記念を機会に発足し以来十年、回を重ねる毎に弥栄え、盛大の一路をたどり予定通り成功裡に十年を経ました。ここで有終美の裡に終止符を打って、またこれからの十年、新しい企画に代えて、デビューし、本年は目新しく、気軽で、朗らかに、新鮮味ある「ゆかた会」を催して、浴衣でゆつくりうちくつろごう、選者も若さ溢れる若手を、よりすぐって、会場もゆかたの柄とりどりの真夏の句会、丁度、先生の喜寿、其上、先生ご夫妻の結婚の年でありますので、前々から、色々の催し物をしよう、と、常任理事会で計画されましたが、先生は、みんなのご厚意は衷心から感謝するが、健康上色々々の催しは、堅く辞退されましたので、やむを得ずご身体にお障り

のない範囲で、同時に、先生の御気持ちに副い、また我々の祝意を受けて頂ける行事をと考えまして、先生の作品頒布を計画し、また、毎年先生のご誕生日を機会に催しています七月行事も、一月繰延べてゆつくりした気持ちで、先生の御意志を尊重して、本催しとなった次第であると、説明され、日本柳界のため、われわれ門下生のため、先生ご夫妻が行末長くご健勝であられますよう願する次第でありますと結ばれ、大拍手裡に降壇、続いて、昨年の優勝者川柳備前支部の優勝楯返還式と十回中二回優勝された最優勝者川柳篠山支部の優勝楯永久保持への贈呈式も華々しく挙行され、これまた、会場破れんばかりの絶賛の拍手に、名譽の優勝楯は篠山支部の支部長小西無鬼氏の受くるところとなった。

いづしか、席題の作句も、机に積まれ、急ピッチをあげ、たくましい句想を纏めるあたり、流石、常連家ぞろいである。愈々兼、席題の披露に移る。席題三題は、遠来の小西無鬼(篠山)、浜田久米雄(岡山)、藤井明朗(島根)の三選者に、兼題の選者は、路郎師の外に若手の新進鋭鋭の人々、内藤さき子、橘高薫風子、菊田いさむ、早川清生の四選者。会場も一瞬にして静けさに返った。参加柳人百数十名、名吟、佳什が多く、思わず感嘆の声、予想外のネライの句には爆笑また爆笑興趣はいや



38年度優勝権を返還する備前支部（横山一声氏）
優勝権を最優勝者とし永久保持の篠山支部（小西無鬼氏）

が上に盛りあがった。拍手又拍手である。続いて、本日のスベッショナルな催しゆかたコンクールは、公平の見本のような投票で、胸番号の十二番の栄さんがトップだった。続く六十八番の久美子さんを遠く引き離し、三十二票の大多数で西出一栄さんの浴衣柄が優勝。姉さん思いの酒田清子さんが説明役に廻り、姉妹の仲よしぶりを見せ、拍手拍手で一段の興趣を添えた。浴衣の投票も和やかに終了。続く愛二、梅里、井平氏らの苦心のゆかたが惜しくも落ちた。次に各題の栄誉ある三才を掲げよう。

兼題「神経」麻生路郎選
布部市 本多清人

(天) 立て札の下へ捨てゝる無神経
岡山県 田村藤波
(地) 姉妹は笑い敏感は怒って居

(人) 居眠りの名人でいふきかなし
兼題「泳ぐ」内藤きさ子選
布部市 本多清人

(天) うちの子も一寸は泳ぐから案じ
大阪府 川村好郎

(地) 泳ぎまじうよ恋にくれず
富田林市 藤岡花梢

(人) カナヅチも泳いだ顔で帰って来
兼題「滝」橋高薫風子選
石川県 大山雅城

(天) 十丈の飛瀑ふたたび春の水
岡山県 田村藤波

(地) 大旱の滝は婦人の昼の顔
岸和田市 内藤きさ子

(人) おん滝二十才の肌の惜しみなく
兼題「部分品」菊田いさむ選
大阪市 今西章雅

(天) 流れ作業部品一個を附ける職
岡山県 西山幸仙

(地) 職長の気がとがつる部分品

(人) 女手が作っています部分品
兼題「隣り」早川清生選
大阪府 下村宇佐夫

(天) 隣の子挨拶をう年輪になり
大阪府 林野睦光

(地) 隣りにも居るのに他国の嫁を取る
大阪府 山田阿茶

(人) 只今と鍵っ
子隣りへ帰って来
兼題「ゆかた」
小西無鬼選
竹原市 山内静水

(天) ゆかた着て
少女おんなとして匂う
兵庫県 水尾水断

(地) 浴衣裏着て
たを帰つてから匂付き
津市 八木摩太郎

(人) 幸福は母あり
母と温泉のあたた
席題「おっちょ
こちよい」
藤井明朗選
西宮市 若本多久志

(天) 適所適材オ
ツチヨコチヨイも使い場所
大阪市 天正みさ子

(地) おっちょこちよい半分きい
て飛んで出る
岡山県 島田雄峰

(人) 自分でもおっちょこちよい
を知っており
席題「べんちゃら」浜田久米雄選
布部市 本多清人

(天) 開店のまだべんちゃらが声
に出す

(地) べんちゃらとわかつていて
も酔いでやり
大阪府 松下たつみ

(人) べんちゃらの歩巾こまめに
ついてゆき
天の天位 麻生路郎選



文化人向きに話す一林家染丸師 (上方落語協会会長)

開店のまだべんちゃらが声に出す
右の通り、最後に先生に依る天
の天の発表があり、本日のこの栄
えある催しの路郎賞の不朽洞杯
は、本多清人氏が獲得され、君の
名誉を費える大拍手は句鑑場を圧
した。つづいて待望の余興とな
る。桂米之助さんが、ウチンクを
傾けられた落語は大好評だった。
次に岩崎愛二氏が、路郎師とは、

古くから特別に呢態の上方落語の
大御所、林家染丸師匠を紹介さ
れ、染丸師は、テレビや、ラジオ
でも、お馴染みであるだけに万雷
の拍手で迎えられた。染丸師はま
ず路郎師のご健康を祝福され、
「川柳雑誌」の隆盛と、みな様の
ご多幸を祈るとの愛相を振りまか
れた。落語の名人芸が、川柳の名
人芸の、われらの恩師と相通ずる
偉大の存在であり、大衆を引き
附けるところ、芸の細かさ、芸の
大きさが窺われ、面白コントラ
スト振り、古川柳一句を、まぜて
落語一席、後ち、ラヂオやテレビ
の大衆向落語と、きょうは少しか
えて、秘公開の公開と、ヤンヤと
会場一杯の大拍手を浴びて爆笑ま
いた爆笑、時の移るのも忘れる愉し
い句会であったが、遠方の人々の
帰路も考え午後五時過、樋口舟遊
氏の閉会の辞に幕を閉じた。

出席者——路郎、霞乃、多久
志、梅里、静馬、榮、小松園、春
葉、章雅、好郎、竜泉、句念坊、
李鳥、きさ子、左文字、操子、す
みれ、あいき、明朗、与呂志、永
断、可住、無鬼、越山、枝葉、溪
花坊、満潮、水京、圭太、静波、
白柳、摩太郎、徳子、白溪子、た
つみ、清生、柳安子、一栄、清
子、八郎、清人、文秋、舟遊、庸
佑、井平、いさむ、一舟、宇佐
夫、松太郎、薫風子、春己、真
砂、一声、幸仙、浄美、良江、雄
峰、のぶ子、水仙、伊久野、竹
莊、阿茶、青米、端歩、笛生、満
秋、メ女、久米雄、愛二、久美
子、金三、谷水、アト、静子、
みさ子、美恵子、万女、季費、静
水、四郎、牧人、吉備郎、良子、

弥生、花柏、宏子、すすむ、敬太、

投句者——美房、千夏、雅城、

黙平、兼孝、千翁、久雄、凡太、

旅風、みのもる、九呂平、東雲楼、

新子、芳月、新雪、潮花、恵二

朗、藤波、保夫、日東里、鶴丸、半

月、和二郎、句楽坊、滋雀、宵明、

恒明、判志、一征、晃男、旭童、

孤呂二、胡人、圭木、静観堂、志

津子、南牛史、トメ子、弘道、い

わを、柳慶、光道、謙士、酔夢、

光郎、杏花、隆子、宗義、味平、

幸雄、魯木、正洲、どんたく、弥

生、八九寸、みつを、黒天子、甦

光、川太郎、喜風、明子、旭峯、

繁太郎、季子、誠二、野迷路、

兼題「神経」麻生路郎選

白溪子

神経のこまかい課長に気に入られ

千夏

神経のとどいた部屋でくつろがせ

春己

医者にまで神経ですと見放なされ

明朗

神経の太い養子に望みかけ

明朗

妻の無神経に感謝する日あり

端歩

頭を使え神経病むなとみたてられ

満潮

税務署からの数字神経質にする

雅城

へた言うて神経を昂ぶらせまし

黙平

長男は神経質で母思い

松太朗

現代の無軌道神経うたがわれ

すみれ

どたん場になって神経とがらせる
兼孝
神経のせいと主治医は笑うだけ
宏子
神経がたっているなと女将の眼
静水
踏切に古い神経をすりへらす
章雅
神経に言うことをすこと突きささり
久美子
ソプラノのお囀りに神経が疲れ
久美子
秒針のように神経質な彼
千翁
神経が図太く金は払わない
静馬
貸借で神経つかわんとこや君と僕
清子
神経の太さで負けた世代の差
久雄
神経がいら立つ隣の新宗教
阿茶
繊細な神経すぐにゆすぶられ
凡太
神経質必要以上に遠慮をし
白柳
来るものが来ず神経をすり減らす
旅風
金儲けは下手神経はたしかなり
みのる
神経抜く歯医者の顔が迫って来
九呂平
快調の機械に神経溶け込んで
東雲楼
倦怠期共に神経すりへらし
栞
惚れていた頃の神経はどこへやら
新子
神経の太きを妻として迎え
水仙
無神経と思える程の気の強さ

芳月
神経は太く小銭を勘定し
芳月
税務署へ社長神経すりへらし
のぶ子
お色気の方へ神経いてしまし
新雪
神経のつぼどこ妻につままれる
雄峯
外科医今全神経を集中し
庸佑
取り口に神経の細さちらと見せ
新雪
神経をゆすぶる鍼が年に合い
潮花
神経を抜かれた様などほけよう
酔夢
妻例の神経腹で挑戦し
雄峯
神経やみ人間ドックまで入り
多久志
十代の経神今日も記事になり
竹莊
無神経事故にもあわず無事に着き
清生
寝間の朝刊神経の立て始め
恵二朗
太い方の神経だけでは生きれず
藤波
箒目が眼にはいらぬ無神経
好郎
神経だよと顔色ほめて去に
保夫
太っ腹に神経質な秘書がつき
失名
神経にさわり国境またも採め
日東里
神経の太さにも触れ通夜の席
鶴丸
神のいたずら図太い神経を娘へ与え
半月

炭塵の爆発妻の顔忘れ
あいき
無神経蠅が毒見をした料理
青米
神経に障ったらしいドアの音
李鳥
猫すきの庄造神経うたがわれ
和三郎
神経を背中に集め振り向かず
良子
神経を使こてる方が無視される
永断
神経質な男がしてた使込み
真砂
神経腹ゆずらぬ肚のボス二人
句楽坊
快感も限界に来てしびれ出し
正洲
本人に言うなと医者の眼に出合い
与呂志
神経の太い人やと敷も思い
宵明
先生の声がしたので発作やみ
恒明
夏バテでのもうても神経にぶいさ
静波
神経が通うていれとおちよくられ
久雄
無神経なパパもあきれ海水着
判志
神経のゆきとどいた借置と金一封
一声
冗談へ女の神経もうとがり
文秋
話声聞けず神経刺激され
一征
神経の細かさ札のしわのぼし
晃男
めまぐるし明治の神経くたびれる
無鬼
神経衰弱で片付けられた自殺

居眠りの名人でいてすぎがなし
旭童
鈍感な笑い敏感は怒って居
藤波
立て札の下へ捨ててる無神経
清人
想親宴(第二会場)
五時半からは懇親宴。岩崎愛二
氏の音頭で路郎先生のご長寿を祝
しての乾杯に始まる。
常任理事の多久志、川村好郎、
西尾榮、松江梅里の諸氏等が己れ
を空しうしてのサービス振りには
頭が下がった。賓たけなわになっ
て、傍島静馬氏は「からかさ」の
替唄で淡いのを聞かされどちら
から読んでも平井平氏は「東京
五輪音頭」で元気なところを見せ
られ、藤村メ女さんの民謡は、い
つもながら定評ある美声、女性軍
代表でもある。遠来の柳友、大木
枝葉氏(篠山支部)は本場のデカ
ンショ、横山一声氏(備前支部)
は浪曲で酒杯ムードを上昇、山内
静水氏(広島県竹原市)は馳せ
参じたよこびを述べた後、当
日、浴衣の天に抜けた句を吟じら
れた。そのあとをうけて菊沢小松
園氏の声色、松江梅里氏のドイ
ツで芽出度お開きとなった。時
に午後七時。(摩太郎記)

優勝楯永久保持
の感激
川柳部山支部 小西無鬼

★ゆかたコンクール★

閨秀作家の一栄さん当選

大阪人はツケもなくおもしろがる人間だったが、近ごろはあまり面白がらぬようになった。

私たちは、やはりオモロイ、オモロイと言うて暮らしたい。そこで、たまにはオモシロお可笑しくありたいとの念願から、ま夏の川柳句会へ、ゆかた会を繰り込んで見たのであった。

同好の人達がかなり沢山いた。一人で三枚も浴衣を持参して、選者室で着替えるという熱心さには驚かされた。昼日中に、派手な踊りの浴衣を着込んで来たのもあった。会社では社長さん、専務さんと呼ばれている人たちが、浴衣がけで受付をやっているのもオモロかった。

みんな、浴衣の投票をしたのもオモロかった。PRに廻った人もあったらしいが買収は行われなかった。まずまず公明選挙という形だ。

投票は即日開票で、当選者は閨秀作家の西出一栄さんだった。どんな浴衣が当選したか、参考のために書くのもムダではあるまい。白木綿で別仕立の浴衣の前と後ろに、川柳が一勾ヅツ散らし書きにされてある前の句は「混浴ヘタ

オル一本たよりにし」で、タオルの文字が女の急所のところへ書かれてある。背後の句は「玉串へ敷かれますと言わなんだ」で、敷かれるという文字が丁度ヒップの

の選み方もズバリである。斯うした苦心作だけに当選しない筈がないと言えるだろう。

受賞の際、演壇の前で、後ろを向き、前を向きして、「玉串」の句と「タオル」の句のショーをされたときに、会場からは破れんばかりの拍手がおこった。一栄さんは女の豆秋だと言われるほど飄逸洒脱な句に秀れている作家だ。

(不死鳥)

受賞の喜びを語る西出一栄さん



写真説明——西出一栄さん(中央)句の揮毫者酒田清子さん(右)酒田清子(左)

ところ」に書かれている。ジツと眺めてみると、誰れでもオモロイ、オモロイと言わざるを得ない逸品である。句は一栄さんの自作で、揮毫は令妹の酒田清子さんの達筆である。アイディアもいいし、句

物籠に心臓の

弱い私には持ち切れない程の家庭必需品の数々、これは度乃先生のお心づくしのアイディアとの事、まだ感激に酔って居ります。晩年を飾る嬉しい思い出の一つになることでしょう。

「優勝榎山支部へ行く」の頭書で川柳雑誌第三五二号(昭和三十一年九月号)十五頁にはっきりと印刷された活字を改めて見直すと恰も、今日昭和三十一年八月九日を予言された様になってしまった。もともと優勝榎山支部は山支部で次々優勝者を出し度い念願は持って居た。句会毎に今年こそ誰かが優勝榎を獲ろうと話し合ったのであるが、仲々にそう易々と優勝出来るものではない。空しく五年を経過して昭和三十六年度の川柳まつりに今年優勝せねば三回優勝は出来ぬぞと支部員一同大いに張り切って応募した所、幸に酒井ひか平君が優勝した。「こりゃいける」と十年間三回優勝を目指して努力しようとお互に契った。然しながら昭和三十七年度、昭和三十八年最終年度共遂に優勝出来なかった。

斯くて本年六月を迎え、本年からは改めて川柳ゆかた会が発表されると共に、川柳川柳まつり優勝榎は十回中二回優勝した我が榎山支部へ永久保持として授与すると言ふ記事を読んだ時の驚きは驚え様のない大きいものであった。数多い川柳支部の中で、小さな我が榎山支部が優勝榎を獲得する栄誉に支部員一同湧き返った。当日は大挙ゆかた会に参加して、支部一同光栄の感激に浸ろうと申し

合わせて居た処、残念なことには酒井ひか平君が母堂急逝の為参加出来なかった事や、交通機関が午後八時を過ぎるとなくなり十六、七キロ奥地へ帰らねばならぬ人が多い為僅か六名しか参加出来なかった事は、路郎先生に対し甚だ申し訳ない次第だった。賞状と優勝榎を頂戴して、只々感謝と感激一杯で、会場の柳友諸賢に祝福の拍手を受けながら川柳榎山支部旗を振り振りお別れして名残り尽きぬ懇親会場より一路大阪駅に直行、やっと列車に乗り込むや祝宴第一歩が始まる。着駅榎山口まで興奮と歓談の裡に過ぎてしまひ十時漸く帰宅。可住君等はそれから十六キロも車を飛ばさねばならぬが元氣一杯に帰って行った。さてこの「榎」には幾方幾千柳人の眼が心が、ついて来て居る。又「飾って置けよ」とて戴いた榎ではない。我が榎山支部は、今後一層川柳社会化の為に「川柳川柳まつり形式」を探り、句会は勿論川柳に関するあらゆる面に於いて、その一カ月間の最優秀者に一カ月保持の権利を与える等の構想を来る九月の支部祝賀句会に発表する事とし、路郎先生の「川柳の社会化」「人間陶冶の詩」として、川柳普及発展に努力を致す覚悟でいる。最後に全国の柳友諸賢の御指導と御鞭撻を心からお願ひ申し上げる次第である。

後世に残す一勾へ取っ組まん

人生漫

河野春三選

尼崎市 高田千穂

薄著い光茫に頭文字が浮く

花園の隅に少女も種子を播く

わが恋を打ちあぐ花火炸裂す

私がめざめぬうちに諾と記す

風鈴が鳴ってる悲しくないわたし

やがて闇の水を隔てた向う岸

貌は永遠に眠る 夏夜は白玉とも

姫路市 時実新子

爪の色みるみる白し失語の天は

みひらいてこの眼埴輪に戻るのか

耳底に葬楽あふれ 家族なし

放心に信号守る稚気があったよ

笑え笑え ハンドバッグは駅夫が拾う

投身の杭に 女と刻まれて

逃げて逃げて救われたいか 女の列車

大阪府 早川清生

掃除婦のひとつずつもつ砂煙

梅雨の犬起ってそこだけ白い土

鼻血に鉄の香 働くために生き

デザイナー愛の瑕瑾を容赦せず

カタカナと漢字の百姓働かず

死ねば仏 記憶にゴム人形の肢態

豊中市 林夢虹

白銀の騎士時切りしときより錆びる

リカ子有情竜棲む淵に石を積む

太郎恋次郎恋石投げの的競う

恋一度 樹皮には深き刀傷

少年失意バーバーナイフに刃が欲しい

孔雀の羽根の矢で君を射ちてみたし

羽曳野市 古川静波

亡者の夢が燃える火災保険が燃える

ネオンの森に住めば鴉ビストルを持つ

胸底の故郷 黒き黒き川流る

後はじっとして暮らせる蜘蛛の一生

娼婦戀う昼の蜚に似て戀う

京都市 大久保和三郎

本能に飽いて笑いに飢えるとき

どん底と頂点で人舵を折る

白百合の思いつめたるまを咲き

揺り籠と杖の間にある勝負

朱に交りて 朱を見失う

今治市 月原宵明

獣の臭うラッシュユから逃げる

カンナ燃ゆそこにガマの憤り

スクラップの山から美を探し出す

サボテンの花へまどわず蝶とまる

人間の歴史 ボタ山崩る

兵庫県 常岡孝風

駄の底に二号の血が流れ告白

女の城を守る虚勢に愛が欠け

女憎むすべてではなし敗北よ

飯を食う時けだものの貌でなし

出世狂に電子計算機が狂い

大阪市 和田痴亭

運河の水逢えば烈しき波立たん

武装なき平和なんて可笑しくないの

扇風機うつむき仰むく 税吏の前

明日逢わん心弾むよ緋の金魚

香川県 三井酔夢

考える金魚びったりと動かない



三面鏡拭う本当のわたしどれ
思い出にすがる盲のかつたむり
人妻を恋う野良犬の目の青さ

大阪市 森川 すみれ

背信の愛 銃もちて打ちたし
心の中で銃口を向けるその愛に
虫なれば踏みつぶしてもやりたし
炎天に咲ける向日葵 捨てし愛

羽曳野市 谷 一 征

寂寞の沙漠時計の音冴える
空間に生きたい時計持たずして
亀になろう最後はきつと勝てるのだから
どたん場の喘ぎ闘牛の血が見える

出雲市 竹内 李朋

鳥取砂丘

風紋に孤独のニレマ遠ざかり
砂丘いま情婦マノンにある起伏
馬と行く砂塵の中のヒロイズム

大山

豪田山暗夜行路に暮れかゝり

大阪市 今 西 章 雅

サンドイッチマン人間ポストが違うだけ
生きる権利をろばん高いというなかれ

地震揺っても空だけは落ちず
掌の平のたこ馬鹿らしい地価騰る

羽曳野市 戎 川 太 郎

星空は縋りつきたい糸をたれ
さまよえるもの多し 灯明の数
嘲笑を背に 夜汽車まんじりともせず
女の地獄 突然老いを知る日

竹原市 松井 可 笑

狂ってる亀裂が地殻いっばいに
そんなことがあって他人になりました
憎悪の眼よりほか投げつけるものがなし

米子市 小 西 雄 々

地球儀をくるくる廻し私はどこに住む
讃美歌を歌い罪なき顔をする

玉島市 水粉 千 翁

裸になって見栄外聞の今日思う
靴だけが光る一人前でなし

宿毛市 渡辺 伊津志

夏の陽が疑問を投げる花に映え

大阪市 西 本 保 夫

朝刊が遅く不吉な予感する

仙台市 平野 光 道

赤になったら進めと丁字路に教う

京都市 室井 八九寸
鳥の声きわだつ時計店の昼

岡山県 永 宗 宗 義

信じ切る目には鎖も恐くない(石鐘の登山)

松江市 柳 楽 鶴 丸

屠殺場の屋根にカラスが数十羽

仙台市 日 東 里

嘘で固め 天を恐れぬ仲でいる

八戸市 川 村 映 輝

失保資格士産にして父帰える

神戸市 吉 田 隆 史

イミテーション意外賢婦の猫目石

新居浜市 賀 本 昇

一寸の境をせせる畦をゆり

羽咋市 三 宅 ろ 亭

凡庸でよかったおれに家庭あり

玉島市 井 上 旭 峰

霜柱ふむ少年の白い息

倉吉市 奥 谷 弘 朗

弱点をつかれ男の意地になり

金沢市 根 上 杏 花

七夕の帷へ幼い夢を乗せ

文蝶逝く



文蝶・土井角太郎氏
(川柳不朽洞会常任理)

十三日午前一時五分、
大阪市西成区松通九丁
目二二

事)が胃ガン再発によ
り薬石効無く、七月二

二十四日午後一時、松
通の田照寺で営まれ喪

主は長男勝彦氏。川柳
では多久志、好郎、白
柳、緑雨、小松園、梅
里、梅志、満潮、文
秋、葉、霞乃の諸氏等参
列、川柳雑誌社を代表
して麻生路郎師焼香、
文蝶氏は大正十三年
頃川柳に手を染め、昭
和十三年六月川柳不朽
洞会員となり、同三十
三年十一月、不朽洞会
理事長に就任、同三十
五年六月辞任。川維住
吉支部、阿倍野支部等
に力をつくした。本職
は板金加工業だった。

文蝶句抄

介抱の食欲病人けなるがり
値上りに子は叱られる日の多し
これやこの掬摸も着ている紳士服
利殖するつもりがおかし株下がる
金貯めて冷たき人の離れゆく
飛び降りる人は防げぬ百貨店
自殺する人とは知らずガスは出る
過去帖に酒一すじに生きた父
デモったと知らずほころび母は縫い
へボの熱こんな大きな菊が咲き
市場籠持つひとときを女医愛し

五分钟前の絶筆

麻生路郎

七月二十日午後から社用で出
た。帰宅したのは夜の九時だった。
帰るなり腹乃が「文蝶さんの息子
さんから、父がもう一週間も食事
をしないのでお知らせしますと電
話がありました。逢いたいのでは
い。疲れてはりましたしやろけ
ど、これから行ってあげなはれ」
という。「そうか」と言った自分
は玄関からすぐ引返し、車を呼
んでもらって「もう談も出来ぬの
ではないか」という不安にかられ
ながら津守に近い文蝶の宅へ出
かけた。親戚の人や子どもたちの座
を通り抜けて、枕辺近く座った。
私は暫らく無言で病人をみまも
った。やがて眼をひらいた文蝶は私

をジッと眺めてうなずいた。
「ボクの衣鉢を継ぐという君じゃ
ないか、気をしっかり頼むよ」
という、
「先へ行って待っています」と言
うだけで、静かに眼を閉じてい
る。胃ガンの再発だからダメだろ
うとは思いますが、このまますぐ死
ぬことはあるまいと思つたので
「では、明日医者に来てもらうか
ら待って呉れ、誰がいいかな」
と言いながら、私は内科医の四、
五人をアタマに浮べて見たが、結
局北川春葉博士がよからうと思
つたので、そのことを告げ、これ
以上疲れさせてはと思ひ引きあ
げた。

翌二十一日の朝、大阪市交通局
病院副院長の北川博士へ電話し、
文蝶君を診てもらいたいことを依
頼した。午後、博士は拙宅まで見
えたので、事情を話し、林女史に
文蝶の宅へ案内させた。
翌二十二日、私は病院へお礼旁
々出かけて行き、病状其他につ
いて聞かせてもらった。
博士はとりあえず注射をしたこ
と、友人の勤務している市民病院
へ明日入院させるようにしたこと
と、暑い頃だから本人もよろこん
でいられたことなどを談された。
ところが、翌二十三日の早朝に
令息勝彦君から電話があつて、午
前一時五分に永眠したとの悲報が
もたらせられた。私は早速弔問に
出かけた。枕辺に遺書が置かれて
あつた。死の五分前に、鉛筆で書
かれたものの(これは写真版にしたが)痛
く出ないで静養を見合せた。
だが次のように判読された。

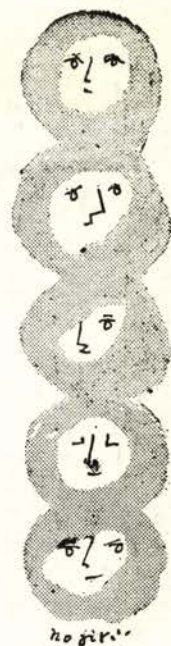
大きな穴

清水白柳

文蝶君がなくなったという知らせを受けて一し
ゆんりとした。古い柳さんがだんだん亡くなつ
て、僕の周辺に大きな穴をいくつもあけて行つた
のだが、文蝶君はとりわけ大きく、ボツカリと穴
をあけて通つたのである。

昭和の初期に「柳の恋」という
のがあつてそこで豆萩、閑路、文
蝶、柳笑などと句を作つたものだ
がみんな故人になつてしまつて、
僕一人がとりこのこされた形にな
つてしまつた。

文蝶君はやさしい名前に似合わ
ずこつち感じのする男だった。心
はやさしいのだが、いつも叱るよ
うなもの言いをしていた。がそれ
も温かい思いやりのあるのがよく
わかるので憎めない男だった。理
論は余り言わず、ひたすらに実行
する男で、それは不朽洞会の理事
長をしていた時によく現われてい
たと思う。どちらかと言えば川柳
家などと堅く言わないで川柳屋と
でも言う方がピッタリするような
タイプの男だった。何にしても
「おう」「よう」と言える間柄の



入門講座

研究題「泡」

清水白柳

句にユーモアがほしい、健康な笑いがほしいということをもいつも感じているのだが、この頃の句にそうした味わいのある句が少なくなって来ているのは残念である。

笑いといっても、くすぐって笑わすのでなく心の底からこみあげる健康な庶民の笑いが句に盛り込まれている。昭和初期の本誌に河童同士愛の言葉は泡となり

この句は雑誌の表紙画になった有名な句だが、こうしたほのかなユーモアの味わいを持った句を心がけることも一つのゆきかたであると言える。今回の集句の中に

痔に即効湯元泡へ尻を漬ける
隆史

があった、着想は面白いのだが何かしら句に品格がないので何故だろうかと考えてみた、それは尻を漬けるという字句にあるのではないかと思つた、湯元の泡へ腰湯する、とか、つかるなり、位いで

尻の字を抜くとすつきりするのではないかと思つた。

うすい毛に申訳けない泡がたち
万竿

この句にもユーモアがある、私も毛がうすいのだが少しも腹が立たない、それは「申訳けない」という中七文字の使い方によってであらうと思われるのである。

滝つぼの泡立つすこさに魅せられる
S

滝壺に泡あり大鯉三尾獲り
R

H

三句共平面描写の域を出ていないと言えるようである、最後の句の旅の暇というところに作者が少し顔を出しているのだが、それだけに終っている私の旧作に「滝壺の泡は奈落へ吸いこまれ」というのが奈落へというところには作意の重点があるのである。水泡のあわれ金魚の御臨終

S

水に浮く泡にとびつく金魚の思
K

退屈な金魚は泡をつつき合
静水

初めの句の、あわれ、と、御臨終は説明になりすぎているし、表現は適切であるとは言えない。二

句目の飛びつくは、フイクションにしても失敗である。水に浮く泡も冗漫である。退屈な金魚の句はそこはかたなきユーモアを感じさせるのである、それはつつき合

という下五文字の働きであるといえる。

蟹の泡にも大小ある山の寺
Y

此の暑さ蟹も泡吹き横へ這
K

泡ふいて蟹は油断のない構
S

蟹の泡子の生けにえとなり
雄声

山の寺の句は説明に過ぎないと
思えて頂けない。暑さの句は蟹が横に這いというのはそのままであ

って句にする程のことではない。油断のない構えという語句には川

柳の常套の手法が用いられているので感心しない。句会の席題などを作句する時によく用いる手法

である。子の生けにえの句には、その生けにえを見つめている大人の

感じがとられているのである

泡吹いて伊勢えび偉容崩さ
ない

句意は平淡なのだが表現だけで生かされているという句である。

章雅

雨垂れの泡に少女感傷す
宗義

雨垂れの泡一つ消え一つ生
和郎

少女の句には表現の未熟さがある、余りにもそのままの文字をぶ

つけてしまった感じがするのである。次の句にはこまかな神経が

感じられる。それは一つ消え一つ生きという表現である。一つ消え

一つ消えでは説明になるところであるがそれをよく心得ていられる

作者の手腕で生かされたのである

ドブの泡ここに生れてここに
弘村

泥溝の泡にたとえて世をひ
春子

メタンガスが発生するというド
ブの泡を詠んでいるが少しも汚

なさを感じさせない句である。ここに生れてここに生き」と作者が

泡に生命を与えて、この住みにくい世相を諷刺しているからである

次の句には教訓的な臭みがある

てすつきりしないのである「世をひがみ」が観念的な句語で句意から

浮き上ったのであらうと思う

泡にたとえてというのも説明的であると思えるので、それをその

清流の泡の命を見て佇てば
村諷子

ぶつぶつと寄りあう主流そ
光道

前の句は尻切れとんぼのような気がした、それは見て佇てばとあ

とへ七七をつけるような句型のためだと思えるので考えてみたい

と思った。後の句には諷刺がある、ぶつぶつと音を感じさせてそこに

主流をそれた不平不満が表わされていて適確な手法であるといえる

石けんの泡七色に空へとび
勝子

シャボン玉泡の仲間器量
和郎

前の句は七色を見つけたのがよかったと思えるが句が平淡である。次の句は器用さで出来た句

である器量よしと見られた作意だけの句でこの句も平淡である。

潜水夫たのもし水泡上りく
S

海の青スクリー泡を噴き
Y

二句共報告川柳の域を出ていない、着想だけが先走ってしまい、句

にまとめるのに急であって、作者が何を訴えようとしているのか句

にはそうした感じがないのである

泡立てた卵の味をきく小指
宗義

カルメラの泡出来て消え出
Y

卵の味の句は着想で生かされた

といえるだけで深味はない。カルメラの句は説明を出していない、出来て消え出来て消えといっただけでは作者が何を感じたのかわからないと言える。

泡たちのよい茶すすめて夫と安し 千夏

泡立ちをほめ三服もすすめられ 弘朗

重文の茶碗いただき泡貫味 句楽坊

初めの句は現在の心境をいかになく詠いあげているのであるが、これ以上深さを求めるのは無理かも知れない。併しつとめて深さを表わすような心がけてほしいと思う次の句にはユーモアがあるが。三服はチョット、オーバーだと思いがこれでもいいだろう。後の句は重文の茶碗が生きているし、泡貫味という下五文字もよいと思うた。

孫に泡遊ばせ背中流す暇 滋雀

孫に泡遊ばせは少しきこわない感じて、これを「孫泡で遊ばせ」と助詞を入れ替えた方がすっきりとするように思うがどうだろうか。石鹸の泡の句は沢山あったが次の句に代表されるようである。

子の洗うハンカチきれいな泡を立て 静水

洗濯機の泡消えそうに待っている 保夫

洗濯の泡妻の座をしかと抱き 雄声

金泥集

選乃菰生麻

「修繕」

雨止んで屋根の修繕又忘れ 一栄
玄人がちよつとさわればすぐ直り 同
母のない子と一目でわかるつくりよう 同
靴修繕に転業をした下駄なおし 同
舶来ヘビゲゼンマイがなまと言う 同
買った値より修繕料が上まわり 同
修繕をしても入歯は音を立て 清子
セロテープ貼つ本屋はまだ貸す気 同
テレビ故障裏側開けて見たものの 同
もう修繕さきそうにないがドック入り 同
修繕を頼めば新らをすすめられ 同
インチキの修繕なじりセゴまれる 同

修繕に出して部品を失われ 同
ソケットの修繕にさえ人を呼び 同
修繕の間店のを貸してくれ 同
増家寺訪えばお寺のもる話 徳子
停年へ入歯の修繕までしとき 同
雨もつたままであわれな未亡人 同
部分品庭一ぱいに陽が沈む 同
修繕をし過ぎ新品ほどか 同
お年です修繕もきかぬらし 同
新築へ隣りのへいも修繕し 同
偏屈のおやに修繕あと廻し 同
楽しみのドライヴ修繕できていず 同
安もの買い修繕ばかりするテレビ 同
修繕には弱し女のドライバ 同

五輪まで修繕のつもり道を掘り 同
老境の胃の修繕で預金ゼロ 同
修繕のきかぬからだで口たつしや 同
オトイレで顔の修繕姦しく 同
修繕はこんどの日曜日まで待つておれ 同
ぬいだまま修繕もせず返して来 同
修繕はしたがやっぱ雨はもり 同
修繕を頼みに行つて映画も見 同
修繕へ母は松下禪尼ぶり 同
網修理中へいわしが押し寄せる 同
つくろいの言葉破れを大きくし 同
つくろいを言わず十八朗かに 同

次回題「爪」切九月末日

洗濯の泡に子供が手をのぞけ 周甫
洗濯に泡の残った手で受話機 滋雀
石けんの泡ふき手紙つまみ受け 光道
後の方の二句は特に泡という主題を生かして躍動的な句に仕立てておられるのが佳いと思った。
泡立ちの凄いい石鹸皆にもて S
こんなこともあるであろうがこの反対の句もある。それは
泡立たぬ粉石鹸のコマーシヤル H
であるがどちらも報告を出していない作者不在の句である。ビールの泡の句は相当あったが二三句に代表されるようである。
ビール泡の見つめて返事考

える 和三四郎
のみたくもないのにからだか呼ぶビール みさ子
惜しげなく泡をこぼして女酌ぎ 万竿
大ジョッキ一ぱい泡をのせて来る 初甫
不精ひげビールの泡が食らいつき 杏花
この外に泡盛りの句があったが取り上げられなかった。
サイターの泡ははかなく音を立て 松風
作者は泡の音をはかなく感じたようである。色々に感じられる音をはかなくでもいいがもっと何かをつかむところまで進んではいい。次は比喩に使われた泡の句である。
たかが平口角泡をとばせど

も 八郎
青春がハッスル口角泡とばし 同
新妻の手前口角泡とばし 同
口角泡を飛ばしたのに握手 句楽坊
誤解され苦勞が水の泡となり 松風
泡食って逃げたとポーズまで見せて 章雅
泡食った声早口の落しもの 同
突然の客へ女房泡を食い 同
泡と消ゆる金に血が争うて 同
泡みたいものと和尚法を 同

説き 春子
それぞれの句に面白さがあるが特に取上げる句はなかった。最後に、
泡食って行き度いような物 同
価高 K
というのがあったがこの泡は飯を食って生きてゆくという腹の代りの泡であつて適切ではない、句にする意図は判るのだが句が消化されていないと思う。
次回研究題「煙」五句以内
切 九月三十日
発表 十一月の予定
宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四 清水白柳

集路一

選者
方満莊
古日竹
田村谷
戸河水

碧い目

戸田古方選

碧い目に浴衣つんつるてんに着る 光郎
反対に堪え抜き碧い目に嫁ぎ 同
碧い目の孤児が苦手なり 宗太郎
碧い目もゆかたで混じる阿波おどり 李鳥
碧い目のレディーの腕に見るうぶ毛 同
祖母と住む青い目母の名口にせず 井蛙
その中に髪紫にした異人 八九寸
税吏にも顔馴染あり日本通 同
碧い目に神のおしえをさとされる 信二
ワンツースリーなどと碧い目の華道 初甫
碧い目がふらふら迷う西成区 保夫
日本語で碧い目途切れがちの礼 淀月
遠慮勝ちに青い目の孫愛し どんたく
碧い目に暇とっているたばこ店 淀月



碧い目のババの血を引く脚線美 繁太郎
碧い目の孫を守りして淋しそう たけお
人形供養碧い目の子も入れておき 同
箸の先見つめて碧い目旅にいる 春己
碧い目の人気集めた京舞妓 良江
碧い目のどれれも同じような顔 晃男
碧い目が覗くラッパに富士が晴れ 代仕男
娘道成寺を器用に踊るあちらさん 歌子
碧い目にも日本のさくらかな 静水
碧い目がスパイにみえる恐怖症 十九平
澄める目の碧さが深いパジャマ又 痴亭
五客
碧い目も日本に住めば判がいり 木魚
碧い目が私へはほえむプロマイド 松風
碧い目の舞はいくらかおかしくて 隆子
モナリザの目の温く碧く 澄み 恵二朗
碧い目は上手にオニオンズを噛み しげお

人

碧い目がかがんで入るみやげ店 李鳥

地

碧い目が遠く飛ばした箸の芋 野迷路

天

碧い目の近くが空いていた座席 雄々

異端者

河村日満選

赤い爪故郷は異端者のように言い どんたく
異端視を得意がつてるように見え 章雅
螢の光うたわぬ異端者と並び 鶴丸
異端者が居るので真実には触れず 藤波
異端者のお茶は自分で入れてくる 木魚
異端者へそつと置かれる朝のお茶 信二
異端者がいて結論が出ぬ会議 初甫
異端者がいるばつかりに会が探め 古心
異端者に恋の相手がみつからず 伊久野
異端者のあわれ恋人までが逃げ 杏花
異端者はあみだくじにも外される 李鳥
異端者も時間を守り出席し 圭水
矢面に立つ異端者の狂気じみ 旭峯
異端者が言葉少なく義援金 紀世美
信仰の自由異端の子も二十才 静水
異端者に花火のような恋があり 愛鳩
異端者に持論があつてもて余し 伊津志
二号まで持つ異端者の高い塀 雄々
異端者に徹して社会賞を受け 旋鳳
異端者にされて未練もない職場 良江

明治・大正

柳誌巡礼

奥津啓一朗

大正十五年二月十一日、弗、第一号、三五判横綴十六頁、天津日本租界吾妻街天津川柳社発行、非売品。

和田黙然人
喰ふ為めに着る喰ふ為めに鐘が鳴る
小林一考

春の陽に向けば臉に知る痛み
大正十二年九月以来暫く御不沙汰致しました従来の「ホコリ」という誌名も飽きましたので今度「弗」と改めて貧弱ながら発行することに致しました云々
とある。

六月二十四日、一泉集、十一篇、四六判袋綴三十六頁東京府下千駄ヶ谷二二一、川柳一泉会発行、非売品。

高橋勢至
灯の渦を遠く掬摸は月を見る
宮崎千寿郎

見返してやる気笑ってただ帰り
○丸(そもその私)前田雀郎(川柳閑話休題)角おび集(雑詠)募集吟佐藤むせき達(紅)等が載っている。

同人欄には高橋勢至、石塚迦陀僧、林透明花、小堀旭冠、山田阿々子、水島峨山、

嫌われる異端特技に支えられ 八九寸
異端者の隣りの席が空いたまま 十九平
異端者がご先祖にまでけちをつけ 宗太郎
異端者の死へ信心が弱くなり 同

住

稀小価値あり異端者の座が保て 十九平
異端者をかばうのが出て仲間割れ 惠二朗
異端者の正義上役には買われ 初甫
異端者に反撥をするペンをとり 雄々
異端者の弁当も向うむきで喰い 不二

人

ある時は異端者にもなる妻の知恵 藤波

地

異端視へ前衛書道黙ってず 八九寸

天

赤旗へ異端視せられて社を守り 宗義

ペターハーフ

水谷竹荘選

我が妻もペターハーフかと寝顔みる 判志
ペターハーフ世間は何とおうとも 鶴丸
明け暮れにオイトと笑い合ひ 晋嗣
ペターハーフ何時までもへそくる気 紀世美
ペターハーフあの新婦は来しけり 圭水
宿帳にペターハーフと書けり 李鳥
剥つてやるペターハーフの白いえり 同
言い訳の脱けなを縫き足すペターハーフ 光郎
噂ほど愛して呉れぬペターハーフ 宗太郎

ペターハーフ内助の功を意識せず 藤波
おめでたの兆告げる隣ペターハーフ 八九寸
へそくりも料理を出来てペターハーフ 信二
ペターハーフ形に影の如く添ひ 井蛙
ペターハーフはめて世間にはばからず 静水
ペターハーフせてめ人前だけでも 野迷路
何も彼もペターハーフの所為ではめ 千翁
ペターハーフ共に生きぬき五十年 歌子
そとづらの良いのが家のペターハーフ 伊津志
一豊の妻です株に強いです 惠二朗
胸張ってペターハーフと言えぬ妻 旋鳳
ペターハーフ今夜も一本つけてくれ 晃男
ペターハーフもセールスマンに弱性 可住
いつからかペターハーフをいと呼び 万竿
この悩みペターハーフにだけは言い どんたく
再婚でペターハーフを引き当てる 愛鳩
子を産んでペターハーフを返上し 光道
ペターハーフあと半分を見失ひ 川太郎
ペターハーフ今日の疲れへ酔いでくれ 静波
ペターハーフとほめて浮気をまだする気 則子
ペターハーフ私の意地について来る 保夫
苦業をばペターハーフ共白髪 繁太郎
金婚を前にペターハーフに先き立たれ 繁太郎
良きママでよき会計士ペターハーフ 春己
半身をペターハーフと英訳し ろ亭
びつたりですぎまを見せぬ夫婦仲 弘朗
ペターハーフ定年のない店を出し 新雪
ペターハーフ御同伴でと無理を言う 不二
オイハイでペターハーフは意が通じ 十九平
ペターハーフ甘えた声で電話口 杏花
ペターハーフはにかみつつも寄り添うて 良江

ペターハーフ親の前では遠慮もし 同
愛をさやけけバペターハーフが笑いだし 十九平
取りたてて言うことがないペターハーフ 章雅
ペターハーフ若さの秘密笑うだけ 同
はしこ酒ペターハーフも何もない 隆子
ペターハーフ夫の心良くつかみ 松風
よそ目にはおしとやかなりペターハーフ 同
ペターハーフ喧嘩しながら老いにけり 古心
新婚にペターハーフを見せつける 三五島

住

ペターハーフ水と魚にも相似たり 宗義
ペターハーフ車押す背に夢を負ひ 井蛙
自叙伝の中で生きてるペターハーフ 伊久野
貧しさに励ましあつてペターハーフ 雄々
ペターハーフこの月給でやる自信 初甫
善後策ペターハーフの知恵も借り 旭峯
趣味にまで歩調を合すペターハーフ 静水

人

キリストの教えにそむかぬペターハーフ 雄々

地

交際費だけは惜しまぬペターハーフ 淀月

天

貧乏なくらしに負けずペターハーフ 木魚

柳箋

本誌への投句はなるべく
柳箋をお用いください。
い。選者が選句される
のに整理上助かると云
っておられます。

一冊(五〇枚綴) 三〇円

川柳雑誌社サービス部

朝倉、メ多、守水天庵、中山木魚、竹内孤舟、山本泉公子、栗原空栗、高山仰天、片岡桜む坊、宮崎千寿郎、鈴木竜、柴田流明子、市川栄公の順で句が並んでいる。
十一月一日、めだま、第二十三号、四六判十六頁、神戸市御崎町老丁目録紡兵庫支店內めだま川柳会発行、編集発行人神戸市御幸本町三丁目二九一、住石松、一部拾銭。
自動車が銃砲店に長く居る 相元 紋太
人の寝る頃気がひも寝てしまひ 住 夢遊
紋太生(独り思ひける)庄万よし(句評)住夢遊(全国川柳紹介)雑誌相元紋太選、おのころ島同人吟行詠草等が載っている。(太田かつみ氏蔵)
月日不明、だんまり、巻一、三五判横綴十六頁、東京市浅草区山谷町四三、村沢方川柳だんまり吟社発行、編集印刷人東京府下三河島町町屋二五七小牧秀夫、非売品。
幾つ目の恋かを病める日に数へ 小牧 迷作
同人村沢小萩、山崎櫻史、綾部あけ鳥、村沢半里宇、藤島茶六、木村あき坊、小牧迷作、山崎美純丸、社友高橋勢至。
こんな貧弱な御期待に叛いた句集ですから雑誌と思つて頂くと汗顔の至りです。
兎に角第一号は之で我慢をして頂いて(略)
今度あき坊、茶六両君が同人に加わりました外に勢至君が社友として御助力下さる事になりました云々
とある。

柳界展望

句会



新設急ホテル創業第一日に宿泊の諸基主幹（八月八日ロビーにて）

▼本社九月川柳句会は七日（月）午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。二十三日の川柳忌を繰り上げての開催。柳友お誘いの上多数ご出席をお願いする。▼七面短詩クラブ川柳句会（和歌山市）は八月二日（日）午後三時から和歌山市北新地の朝千鳥で開催。▼大阪通信病院川柳会八月句会は二十九日（土）午後二時から同病院北館五階会議室で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）八月句会は二十七日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は八月二十八日（金）午後六時からコクヨ株式会社会議室で開催。▼川維備前

支部（岡山県）七月例会は二十五日浜田久米雄居で開催。▼富柳会（富田林市）夏季吟行句会は、八月二十三日（日）午前十時河内長野駅集合、河内長野市滝の畑へ。▼愛媛夏の川柳大会（大洲市）は、八月二日（日）午前十時から大洲市童謡山で開催。▼広島平和祭川柳大会は八月九日（日）午前十時から広島市比治山公園内山陽文徳殿で開催。▼北村白眼子・長谷川紅露古稀祝賀川柳大会は昭和三十九年九月二十日（日）正午から函館市蓬萊町東照宮大広間で開催。▼東京オリンピック記念川柳競吟会は十月十一日（日）午後一時から鳥森神社社務所で開催。第一部宿題（各三句吟）は聖火・万

国旗・選手・金メダル・記録、宿題は切は十月五日、投句は五十円封入の上、東京都港区芝新橋六ノ六六東京観光川柳研究会宛。▼新潟震災復興第九回新潟市川柳大会は、昭和三十九年九月十三日（日）午前十時から新潟市上大川前商工福祉会館で開催。▼第十五回名古屋まつり協賛名古屋短詩文学祭作品募集、文学祭大会催事の要項は、それぞれ川柳近作三点を八月二十五日までに、作品展示会は十月五日から十一日までの七日間、名古屋市中区朝日町名古屋市教育館で



天満町神社へ川柳奉願新願（慶平川柳会員有志）

。▼臥竜川柳会（須坂市）では須坂市十周年記念参加、須坂市民館川柳句会第百回記念川柳会が、十月二十五日九時半から臥竜公園須坂市から、ゆかた会では先生

の辺りまで到りますや不安です。文蝶兄の他界を悲しみます。▼井上圭太氏・古川静波氏（羽曳野市）から、「ゆかた会では先生

国旗・選手・金メダル・記録、宿題は切は十月五日、投句は五十円封入の上、東京都港区芝新橋六ノ六六東京観光川柳研究会宛。▼新潟震災復興第九回新潟市川柳大会は、昭和三十九年九月十三日（日）午前十時から新潟市上大川前商工福祉会館で開催。▼第十五回名古屋まつり協賛名古屋短詩文学祭作品募集、文学祭大会催事の要項は、それぞれ川柳近作三点を八月二十五日までに、作品展示会は十月五日から十一日までの七日間、名古屋市中区朝日町名古屋市教育館で

坂市公会堂で開催。宿題「雑詠」選者は民郎・呑風・多佳史・曙光・有為郎・紫苑郎の諸氏。連絡所須坂市太子町高峰柳児方。

消 息

▼小谷源氏氏（東京都）は八月九日、迷亭・芳浪・一甫・雨後亭の諸氏と飯坂温泉川柳会を訪問された。▼後藤梅志氏（大阪市）は前立腺手術後まず順調に回復しておられ、当分振養専一を心掛けますと、▼戸田古方氏（豊中市）は七月二十一日から三十日までを若狭高浜町和田の臨海学舎で過ごし、まっ黒になって帰阪された。▼本多柳志氏（大阪市）は八月二日三日の両日若狭高浜海岸で家族連れで清遊を楽しまれた。▼日本海の風大阪の汗が引き」

「西いわを氏（羽曳野市）から、「先生の喜寿お祝い申し上げます。暑さの折柄ご自愛の程願います。療養生活の間に聖書研究に入りました。私の信仰がど

決めた次第です。▼福田丁路氏（高槻市）は、今夏は当たり前で、勤務先の学校の体育館の新築、校舎の全面的修理、運動場の盛土等々、休日は休日で、田圃の

田垣方大
倉敷市水島西寿町七番の八
電話倉敷四四一七二〇八

残暑お伺
直々にお目にかかる機会を頂戴し、いろいろご激励までいただきほんとうに嬉しく存じました。ゆかた会への出席は大変勉強になり、これからの毎年の出席を心に

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

不朽洞の人々



東奥日報社副社長、工藤礼作氏

しあわせは足が二本に手が二本

(甲 吉)

私は「凡」という字が好きである。辞海によると「凡」は、なみ、普通、なみのもの、普通のものとなっているが、私は、ほんとうのしあわせや、たのしみは「凡」にある、という気がしてならないのである。だから私は、初孫「伸」に名前をつけるときこの「凡」を考えたのであるが、これは訓の関係でやむなく断念した。残念であった。

仕事に励んでいます。「玉の汗はったらかして草を刈り」▼唐崎専翁氏(吉屋市)は暑気当たりで休養中だが、まだまだ暑気が多い故、当分昇天は致しすまいと思いかじりつき。▼川岡雲眼子氏(諫早市)は料理屋(のぶ)を開店されたので、諫早川柳文化会、諫早県税グループとの合流祝賀会を開催された。▼弘津柳慶氏(広島市)は八月一日付で、日本専売公社広島地方局病院保健主事として転勤された。▼隠岐不醉氏(姫路市)は長良川の鶴飼見物を兼ねて岐阜、名古屋方面をうろちろして来ましたが、何処も厳しい暑さに変わりありません、日本ラインも水が少なくてもう一つと言うところでした。養老の滝で、「養老の滝壺も矢張り水だった」▼久家代仕男氏(平田市)は過般の水害で町内の過半数以上が床までの浸水、稲の被害も大きく、食糧行政にたずさわっています。

れる氏は対策、陳情に大車輪だとのこと。▼塚越迷亭・高須咄三味・藤島茶六・松井清志の東都柳人諸氏を迎えての奥摩耶山荘での歓迎会席上からの八月十三日付寄せ書が届けられた。不二也・波郎・乱歌・天樹・す・む・薫風子等の名がありその和やかさが偲ばれる。▼高須咄三味氏(東京都)は八月十四日午後薫風子同道で不朽洞を訪問、路郎夫妻と歓談された。▼長谷川鮮山氏(名古屋)は七月十九日、中川柳会の一泊吟行に同行、信州天竜峡畔の阿知原の湯、月泉亭に清遊された。▼尼緑之助氏(出雲市)は今回の水害では二尺程度の浸水ですんだところが、山間部には惨状を呈したところが多く、七月二十四日夜の原仙居の句会には水害の影響で五人の出席者という淋しさであった。山田雅支那のうち最も古い歴史の出雲支部四十周年記念の行事を、来年あたりに計画しております。▼津秋六花氏(宇部市)宅

が増改築され、川柳支部支部句会の会場が同氏宅に戻ることとなった。▼若本多久志氏(箱根)は十六日からこちらに来ています。朝八時から夕六時まで講義やらケースメソッドによる近代経営学のゼミナールで二十二日までのじめられる訳です。只涼しいとい(夜は小寒いくらい)夜、早く寝られるのが楽しみです。▼山内静水氏(竹原市)は八月九日のゆかた会の帰途、山田季賛居で一泊、翌十日は大坂米原間を夢の超特急に試乗。「出た二百軒夢心地」▼西屋榮氏(強羅花壇より)五組のおしどり連と富士五湖を巡り、富士山の五合目迄登って今晩はここ強羅で泊っています。「バスツアーガイドが喋り皆眠り」八月二十四日。▼橘高薫風子(徳島)にて、誘われた機会に阿波踊りに来ました。想像以上に熱狂した街に驚きました。「とどまるを知らぬ踊りに身を流す」八月二十二日。▼中島紫痴郎氏(長野県)の

酒

清



金露酒造株式会社醸

灘・魚崎

句碑が出身地の新潟県に建設されることになった。目下建碑資金が中島紫痴郎先生句碑建立委員会(委員長井上四郎)によって募

▼若柳潮花氏(高槻市)夫人泰子さんは七月廿八日午前〇時十分急逝された。葬儀は八月二日午後三時から団地の告別式場で営まれ、陵乃女史が川柳家を代表して焼香された。謹悼。▼酒井ひか平氏(兵庫県)母室とみさんは七月二十九日老衰のため死去された。年八十五。謹悼。

住所改称
▼水谷谷水氏の住所番地が改称された。新番地は、倉敷市水島西常盤町二番十七号。田垣方大氏は下記の如く改称。倉敷市水島西寿町七番の八(電話倉敷四四一七二〇八)。

転居

▼光好陽子さんは新築して下記へ居を移された。岡山市田山九九の一〇番地。▼賀本昇氏(大阪市)は大阪市港区八幡屋浮島町二ノ一三五相川浅吉方へ転居された。▼足立春雄氏(徳島市)は徳島市庄町一丁目徳島大学蔵本地区宿舍三号へ転居。電話徳島二局七六五七番。

電話増設

▼松江梅里氏経営の大万本店に、大阪(六二一)七七八二番が増設された。(薫)

不朽洞会から

★残暑がなかなかきびしいですが、会員諸氏にはご健勝で句に精進されていられること何よりとおよろこび申し上げます。別稿広告の如く、先生の喜寿・金婚のお祝も着々とお申し込みをいただき役員一同感謝しております。この上ともよろしく願ういたします。

★新会員紹介

八月

▼賀本昇(大阪市)正——霞乃女史推薦 (多)

第百六十二回

大萬川柳

兼題「けちんぼ」 入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 五百十五句
入選 四十五句

島取 一保 けちんぼと言われてもよし未上人
篠山 可住 赤い羽根つけてけちんぼ胸を張り
山口 弘道 けちんぼの遺産で派手に外遊し
富田林 美房 けちんぼの亭主を持って気を使い
大坂 痴亭 女房よりけちんぼ金が惜しいなり
玉島 千翁 苦勞ばかりさせた母なりケチでよし
奥 魅光 けちんぼに金借りて発つチチキトク
大坂 弘村 けちんぼの家に生まれて縁遠く
空閑 忠三 かあちゃんけちんぼですと綴方
食散 弘朗 二代目も安泰けちも引継がれ
西宮 野菜 施した恩は忘れぬけちんぼう
八尾 弥生 けちんぼうまた只酒に酔いつぶれ
出しただけは飲んでかえつたけちんぼ
けちんぼで築いたのれんに名が残る
岡山 宗義 親のけち知れた少年Aの記事
日銭さえ妻に困らす鍵を持ち

神戸 どんたく けちんぼに徹してホステスバーを買い
富田林 東雲楼 けちんぼのよろめきだした変りよう
割勘でいいと課長のケチくさい
けちんぼのあれで時々女連れ
豊北 好郎 けちんぼの夫であって気を許し
やり手にもけちんぼにもなる専務
二次会へけちんぼばかりついできた
大坂 晃 けちけちとしてるわりには貯めとらず
けちんぼと噂されても持つ強み
しづちんのこだけ親のあとをつぎ
五客 富田林 八郎 赤字対策けちんぼの門叩く
石川 雅城 けちんぼは大きな笑い声立てず
玉島 旭峯 明日知れぬ生命へうもケチケチし
高槻 静馬 けちんぼにもなるさ五人の娘の育ち
大坂 柳志 妊娠とわかったケチの慌てよう
(人) 和歌山 木魚 食堂へ米でも母だけケチくさい
(地) 豊北 好郎 ようはなれんと見たか男けちりだし

(天)

大坂 小松園 けちんぼが帰るみんなの気が揃い
大萬川柳ベストテン (八月現在)

一	梅里	一三、五	大坂	一五	美房	七、〇	富田林
二	好郎	一一、〇	泉北	一六	遠二	六、五	笠岡
三	桃里	一〇、五	笠岡	一七	進之助	六、五	大坂
四	静馬	一〇、〇	高槻	一八	阿茶	六、〇	大坂
五	小松園	一〇、五	大坂	一九	春菜	五、五	大坂
六	晃	九、五	大坂	二〇	句楽坊	五、五	京都
七	きさ子	九、五	岸和田				以下略
八	木魚	八、五	和歌山				
九	方大	八、〇	倉敷				
一〇	柳志	八、〇	大坂				
一一	夢虹	八、〇	豊中				
一二	章雅	七、五	大坂				
一三	静波	七、五	羽曳野				
一四	宗太郎	七、〇	石川				

大坂 阿倍野区松崎町三ノ一〇 大萬川柳会

風流 人間横丁

東野大八著

B6型 二五八頁

価250円 送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

大阪市住吉区西内万代五丁目25
発行所 川柳雑誌社
電話大阪0681振替口座大75050

卷之六

ひとり来て滝を父とも思うなり
 ここからも滝が見えなすところてん
 滝へ来て水筒の水を捨て
 滝を潜りて象のごとくに死ななかな
 兼題「部分品」 菊田いさむ選

停年も待たず部品が狂い出し
 六三四を出て部分品になる
 部分品に似た脇役に甘んじる
 時計ならネジと言われて平社員
 会社では部品のような役をもち
 部分品のように停年あしらわれ
 部分品らしくきっぱり勇退し
 部分品が違つて男女に区別され
 目立たない処に大切な部分品
 部分品改造しちやつた隆鼻術
 内臓の部品きつたりつないだり
 眼鏡外科部品のよう取替える
 整形外科学部品を全部とり換える
 外見は鬼に角部分品お気に召し
 部分品比べる美人コンテスト
 切り取つた盲腸これも部分品
 人間も部分品あり角膜炎を植え
 ビンセットでつまむ部品の命
 六十年未だ部分品異状なし
 部分品とりかえますと整形医
 三力年入院

取り替へる部品あつたあつたば
 部分品なくして困る中古品
 ブラモデルバを困らす部分品
 部分品集めて修理は自分でし
 部分品古い機械に親しゆず
 部分品一つ欠けたでバスが事故
 肉眼じゃ見落しそうな部分品
 部品発見歯車も調子よく
 くる来品修理に困る部分品
 ご自慢の舶来部品が手に入らず
 部分品とり換えました請求書
 中古の車へ部品高すぎる
 流行におくれて部品が見つからず
 争美

新子
 光郎
 静水
 蕉風子
 永断
 清生
 梅里
 静馬
 芳月
 杏花
 圭太
 多久志
 阿茶
 美恵子
 文秋
 のぶ
 満潮
 枝葉
 隆子
 半月
 無鬼
 鶴丸
 枝葉
 宏子
 宗義
 志津子
 美房
 清人
 静波
 南牛史
 恒明
 黙平
 晃男
 柳宏子
 静水
 久雄
 争美

良 子 知 っ っ っ ち ゃ は り 嬉 し が り
 阿 茶 堀 ぬ け た べ ん ち ゃ ら 酒 が う ま く な り
 金 三 べ ん ち ゃ ら を し に 台 所 ま で 菓 通 り し
 良 子 べ ん ち ゃ ら も 言 へ ず 無 口 は 吞 む ほ か り
 操 子 べ ん ち ゃ ら で 言 う わ け で な し 若 く み え
 万 女 べ ん ち ゃ ら に 顔 の 筋 肉 し ま ち ない
 笛 生 べ ん ち ゃ ら に 女 は う ま く 乗 つ ち ま い
 良 江 べ ん ち ゃ ら の 電 話 お じ ぎ を くり 返 し
 梅 里 べ ん ち ゃ ら で う し ろ 姿 を ほ め て お き
 良 い さ な べ ん ち ゃ ら を 言 い く 吐 は 舌 を 出 し
 句 念 坊 べ ん ち ゃ ら と 知 っ て も 社 長 黙 っ て 居
 谷 木 べ ん ち ゃ ら 焼 香 を 待 っ つ べ ん ち ゃ ら い そ が し く
 き さ 子 手 の ひ ら の 目 驚 べ ん ち ゃ ら 揺 れ つ つ け
 満 秋 べ ん ち ゃ ら へ 叱 ら れ そ う な も の を 買 い
 み さ 子 べ ん ち ゃ ら へ 叱 ら れ そ う な も の を 買 い
 あ い き べ ん ち ゃ ら で よ し お 若 い と 言 う て は し
 章 雅 べ ん ち ゃ ら が 嫌 い こ い つ は よ う 伸 び ず
 柳 宏 子 べ ん ち ゃ ら だ っ て 一 座 を 白 け さ せ
 女 べ ん ち ゃ ら が す ぎ て 一 座 を 白 け さ せ
 静 馬 べ ん ち ゃ ら 聞 い て 買 の が い や に な り
 一 栄 べ ん ち ゃ ら を な ら べ て お い て 請 求 書
 一 栄 べ ん ち ゃ ら の 言 え ない 人 に 子 は な つ き
 小 松 園 こ の 頃 の 子 供 べ ん ち ゃ ら に 乗 っ て 来 ず
 清 子 マ イ ン ス に な る べ ん ち ゃ ら を ま だ つ づ け
 舟 遊 べ ん ち ゃ ら を 叩 っ っ け 開 け る 回 り 椅 子
 春 染 べ ん ち ゃ ら へ 叩 っ っ け 回 眼 鏡 拭 い て い る
 文 秋 べ ん ち ゃ ら は 死 ん で も 言 え ぬ 臍 ま が り
 阿 茶 べ ん ち ゃ ら も お っ と り し た 京 訛
 舟 遊 商 売 で す べ ん ち ゃ ら に 苺 が あ り
 一 声 べ ん ち ゃ ら で は も っ て 呉 れ た を し れ が り
 好 郎 ほ ん ら っ ち へ 惚 れ た か べ ん ち ゃ ら も う 言 わ ず
 一 舟 聞 く 方 が べ ん ち ゃ ら に 聞 い て い ず
 一 舟 下 心 あ る べ ん ち ゃ ら も う 見 ぬ き
 松 太 朗 べ ん ち ゃ ら の 一 つ も 言 え と 叱 ら れ る
 白 溪 子 退 職 を し て べ ん ち ゃ ら と 縁 が 切 れ
 白 柳 金 が 出 来 る と べ ん ち ゃ ら 飽 い て くる
 吉 備 郎 べ ん ち ゃ ら に 言 う 口 だ け は 別 に 持 ち
 永 漸 定 年 の 椅 子 へ べ ん ち ゃ ら 寄 り 付 か ず

ばんやうらへ要心しろと袖を拭き 越山
 川維 阿倍野支部句会（大阪市）
 金井文秋報
 アル中が暴れています百十番 梅里
 食い合わせ理屈解らぬまま信じ 清子
 中毒やないぜと手先がふるえとり 多久志
 運が向いて来たら久しうりの故郷 恒明
 秀才も馬鹿もないが水いらす 柳志
 傷ついて帰る故郷の水いらす 弥生
 奥さんを忘れてふぐと心申し あいき
 寝ていたらまたいで通る水いらす 一舟
 七夕かそうが乾杯しにくい か 素郎
 薬メーカ中毒さすほど宣伝し 嘉代子
 あいさつは後に回した久しぶり 金三
 的一个窓窓の星祭り 雄峯
 手金まで打って帰って気が変り 文秋
 水いらすもうしのびよる倦怠期 痴亭
 水いらす勝手な時だけ母呼ばれ 一栄
 七夕へ子の初盆を偲ぶ笹 滋雀
 カイ性のない良人だが水入らず 一三夫
 村が市になってた久し^がの故郷 美房
 早計に袖引妻があつて無事 宗義
 水いらす遠慮気兼ねのない裸 柳宏子
 うい^い白子あるあるで喰べさせず 静馬
 星空にこぬ人待つ虫の声 閑馬
 はうずきを取つた七夕なつかしく 井平
 水都祭花火が消んだ星の空 章雅
 久しぶり座蒲田出^すのも忘れてい 好郎
 宝石もミンクも要らぬ水いらす 凡子
 良い政治待つ七夕の笹しおれ 白柳
 短冊に心の隅を覗かせて 八郎
 瘦せたと口には出せず久し振り 小松園
 川維 玉造支部句会（大阪市）
 西出一米報
 仏像のゼスチャーでせびりにくる息子 井平
 落ちつけと言うてる方も腰が浮き 文秋

寝ていらぬのにと人の氣も知らず 恒明
進學へ無口の父の眼がくぼみ 一栄
朝寝する母を子供等のぞき込み 六童子
扇風機月賦の風も又涼し 城東
扇風機暑さに負けた顔でかけ 金藤
アイロンを背中へ回す扇風機 白柳
たなかとこばれてあつたとも言えず 静馬
小刻みに退職金が減る孤独 章雅
小刻みに儲け不渡り擱まされ 珠笑
逢いたいのは俺ではのうておれやら 野菜
パパ浮気ズバリ当たつたママの勘 半月
嫌いよとズバリ言う娘の目が笑い スリッパズバリと脱がず氣をもたせ 市郎
程々に呆けて世渡り上手なり 清子
タイミングよう呆けるのも年期入り 一舟
とぼけてはみたが図星の顔になり 柳宏子

川雜
京都支部句会（京都市）
田中鳥雀報

氣の短い話してめがねを仕舞いおり ゆきら
女の子が短氣な父に付いてゆく 豊次
栓ぬきが待てぬ口から血をこぼし 烏雀
支那の山仙人だけが食えるもの 紫蘭
海濱の山あられ死屍を積み 枯粒
請売りで真実味ない長談義 句楽坊
鍵っ子の請売りらしいませた口 鳧一
怪談を聞いた程には恐がらず そよ風を乱す弟婦 磯子
そよ風は鶏まだかきいとこつづき 司郎

川雜
大聖寺支部句会（加賀市）
野村味平報

老婆の満期にかける夢があり 酔夢
人生も満期に達者がほこり近き 雅城
刑満期守衛と握手して別れ 一路
満期にも近く次ぎを掛けさされ 味平
まぐれては来た道へ来る家探し 併呑
合格もまぐれて人生変つて来 魯木

掛軸で部屋がまぎれたのに気付き 光郎

川 雑
ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

子に期待かけて内職夜を更し エス子
内職が過ぎて本職くびになり 平八郎
内職で儲けた金は医者がとり あき坊
内職に化粧して出る若い妻 紅茶
内職も知らず近頃小皺ふえ 雪女
子の為と思へば素手内職 内海
内職もいいが眼につく妻の瘦せ 快夢起
内職の苦勞をよそに飲み歩き 同
内職が子の靴となり本となり カロ女
学士号とて内職実を結び 曉丹
やけくそで内職したを飲んじまい 魔花麗
手内職家風のように子へつづき 芥平
健康によいと内職つづける気 浅太
内職をおやめなさいと子と言えど 紅溪
内職をするに不似合はどめかし 三石
内職は金と時間のタイミ 静紀
乳呑子は母にまかしてミシン踏み 万里歩
暇つぶし習った手芸が役に立ち 美丹
内職の妻へ気兼ねな酒を呑み 泉水
子に賭ける夢内職に精を出し 柳葉
内職の母にテレビが邪魔になり 柳山
百貨店日にち毎日人種展 平八郎
百貨店の側でビーナツよく売れる 万里歩
百貨店から帰って見れば妻は留守 快夢起
玩具部で子は勇敢に座り込み 浅太
百貨店子にはねだられ金はない 浅海
百貨店の進出小店立ちゆかず エス子
百貨店の隣り空席ないそば屋 泉水
百貨店で見栄が要らない物を買 曉丹
百貨店めぐりにへそくり連れて行き 美丹
百貨店めくりにへそくり連れて行き 魔花麗
世辞言わぬ百貨店母の気に入らず あき坊
無意識に財布をあける百貨店 紅茶
目につけるもの皆ほしい百貨店

百貨店行くもおそろし子 沢山 紅溪
殺生な商店区域に百貨店 柳山
デパートに無いのは棺桶ばかりなり 柳葉
デパートの玩具部孫の眼の早さ カロ女
デパートで父は書籍部ひまっふし 静紀
商魂をマスコミに見る百貨店 三石

川 雑
岡山支部句会（岡山市）

浜田久米雄報

涼しさは素足が匂う浴衣がけ 宗義
美しい素足ですねと蚊がとり 秋月
浴衣着の素足を蚊だけねらつて 照路
裾割れて素足の白さ目にささり 三平
地下足袋をぬいだ素足にある匂い 飴ん坊
湯の街の朝へ素足の妓が通り 鯨虎狼
スマートな素足ななめに座席とる 柳五郎
篤農の素足大地に血が通い 哲郎
大根のような素足を投げ出され 謙士
素足にも女女のしながあり 佐加恵
湯の町を妻と歩けば寄つて来ず 久米雄
やぶ医者と言われない診断書 鼓山
幼な顔まだあるあると師の笑顔 天竜

川 雑
備前支部句会（岡山市）

創立十五周年記念川柳大会
浜田久米雄氏婦報

横山一水報

追憶の母の残せし手織じま 声報
追憶の中に怒がまだ残り 賤女
追憶の亡母の笑顔に励まされ 柳風子
お相手が税吏と知らずはら吹き 千秋
骨のある相手へ向かう深呼吸 柳風子
相談の相手に鼻筋冷たすぎ 斧九郎
六十になつても女里をはめ 正洲
母ものへ母もう一度泣きに行き 淡舟
どたん場の女はだかく勝負し 鼓山
親類のつき合いをすの薄い壁 千翁
かべかけのハンニャが笑う酒の酔

荒壁の土の匂いに住みなれる 紅月
駅前が五輪模様で色どられ のぶ子
十五夜を忘れさせてる駅の前 賤女
駅前の火事に汽車おくらされ 照路
静物のようにモデルの動じない 秋月
モデル校PTAの寄付が増え 照路
器量良しモデルになつてお国入り 千秋
犯人と信じられない丸い顔 淡舟
死に目にもえぬ墓前に背を丸め 東岸
損をみな独りでかぶつて丸さ 七面山
灰皿に口紅ついたのもまじり 芳月
先客の灰皿煙る応接間 春巢
電報と聞いて灰皿けとばされ 東岸

川 雑
土佐支部句会（高知市）

川竹松風報

白バラを愛して娘縁遠し 勝子
白と言へば黒と言いたい十七才 窓月
人の世を白から黒に陽は沈む 紅雨
借りに来た襟の汚れが瞳にたい 寛
もてなしがよくて借金言ひ 呑洋
借金をする実印のふちがかけ 大將
言ひこめてやうたい奴に借りがあり 蟠蛇
女房が行けばいくらか貸してくれ 松風
泣きをならべつくして断われ 俊一郎
四十代女は顔へ金を入れ 山里
盲人の感に狂いは銭のこと 翠川
率直に言えは恋人誤解する 大破
更年期この頃妻の物忘れ 羅春
押し売りの米ぬかとりの二階借り

大 萬

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL (三三) 三九三五番
TEL (三三) 七七八二番
TEL (三三) 〇一四七番
アベノ橋近地下食通街
TEL (三三) 〇一四七番
串の店 南区豊屋町三ツ寺セシヤ
TEL (三三) 九一八四番

大阪通信病院川柳会（大阪市）
森下愛論報
よそさんのボーナスを銀行屋 風仙洞
経営不振もう銀行は冷たい目 夏生
銀行の何か冷たいいんぎんさ 春雄
バンクから借れる強味へ増築し 宏子
彼氏銀行マンなのと得意顔 ハナ子
銀行にもへそくりの口座もち 良子
夕立があつたんかいと帰つて来 落児
都大路明治にかえる祭りの灯 草右
脊中の子が重い祭りの帰り路 愛論
栄転も嬉し古果の味もよし よしを
祭りはやしが未練になった鹿島だち 史葉

あすなる川柳会（大阪市）

山本素郎報

貫録で集金人を追いかえず 景達
貫録は三日ぐらいて身につかず 万利
ボク一人乗せて発車のローカル線 弓彦

気兼ねなく夢は隣りへからみつき 一枝
 気兼ねなしに来いと手ぶらに氣に入らず 慶之助
 貫録が異うと初手から逃げをうち 百酒
 気兼ねないアバウトで子を育て 恵美子
 意地悪の姉が彼氏と歩いてた 尤三
 矢印の氾濫街が遠くなり 福郎
 商いがどこでそれたか子の自慢 //

南海電鉄川柳会

(大阪市)

辻 圭水報

ビヤホールミナミの空に星が降る 句念坊
 パトロンを握みミナミで小店出し 鳥莊
 ドブ川もネオンが映える夕涼み 和郎
 名優もきょうは素顔でミナミに居 摩太郎
 社用族としてミナミの灯を泳ぐ 宏子
 ミナミです男養う女も居 圭水
 たからただで帰ったミナミなり 路郎

富柳会句会

(富田林市)

阿部柳太報

殿御には用ない場所の台所 菊代
 電化せるキッチン暇をもてあまし すみれ
 テキストを片手に新婚の台所 花梢
 なんとなく気楽に泣ける台所 美代
 ネギを切るリズムに明ける台所 柳太
 心配は大きな娘の婿のこと 重子
 心配をさしてさほどに悪びれず 摩太郎
 どの医者も心配はほんとにカルテ書く 来更米
 心配のさ中子供が帰って来 青米
 十年目孫の泣く声に目をさます 林松
 泣くだけ泣けば気のすむのも女 清子
 ほんとうに泣いてくれるは妻一人 栄
 セーラ服一人が泣けばみんな泣き 市郎

尻込みの出来ぬ男の意地に泣き 紅月
 特価品又尻込みがしてやられ 六童子
 もうひといき思ったとこに横車 ふみ子
 横車二人の恋にけちをつけ 半月
 横車押した日金魚死んでいた 美房

コクヨ川柳会

(大阪市)

川口理休報

スリ君よ残念でしたカラ財布 武
 女のように指いたわってスリ一代 ルミ
 美女スリが手錠のままだと喚い 昭一
 写真みりや善人そうなスリの顔 勝一
 されいずき他人の部屋まで掃除する 一生
 潔癖で夜の探訪にはつとかれ 亀心
 潔癖であきまへんわと安芸者 はたる
 潔癖がむやみやたらに拘み交し 理休
 夏の夜金魚無残にかけられて 彦彦

城北明老句会

(大阪市)

田中風柳報

おとなりは仲良し夫婦働き手 久子
 ハイキング若き見送る一人旅 喜久
 万才師笑わぬ客に汗を拭き 須美
 亡き友の久しき名前書き終わり 富士
 コーラスで麦刈進む若夫婦 頼光
 なるように成って新聞種になり 茶々坊
 あじさいや伯父亡き後も衰えず 芳子
 釣れぬ日は近くで鯉がはね上り 源川
 母の日に貰った下駄ももうちびり 上林
 夏祭りボスが持ち来る奉賀帖 一登
 立飲みを見ぬふりしてつばを飲み 誠
 テレビに見るお祭り見とく年になり 繁
 取る梶が下手で亭主は茶碗酒 風柳
 聞きかじりの医者の言葉で困らせる 美代
 雨模様傘を出されて腰を上げ 清光
 切角の赤子に面会ガラス越し 弘村
 今日雨またバチンコで日を送り 弘充

路郎先生の喜壽・金婚の 祝賀について

——お知らせとお願ひ——

日本柳壇の巨匠であり、我等の恩師である麻生路郎先生の喜壽・金婚祝賀行事については本会が主体となつて昨秋以来慎重な企をととのえ、全川柳人ご賛同の下に一大盛典を挙げる運びになつておりましたところ本春に至り路郎師から

で、何卒この機を過ぎずご参加お申し込みの程お願い申し上げます。

昭和三十九年六月吉日

川柳不朽洞会 常任理事

北川 春集
 松江 梅里
 川村 好郎
 西尾 榮
 若本多久志

麻生路郎先生の
作品頒布

作品 頒布

作品 —— 一、軸・横額二、色紙三、短冊

揮毫料 —— 不要とし、お申し込み参加者より、喜壽・金婚お祝金を右相当額提出して頂きます。この額につきましては常任委員会に於いて各標準を定めてありますので、お申し込み受付と同時に詳細な規定をお知らせいたします。

頒布期間 —— 先生のご健康状態も考えまして、お申込順に六カ月以内とし、昭和四十年三月迄とします。

大阪市住吉区万代
 西五丁目二五

申込所 川柳不朽洞会

電話大阪六七二局六〇八一

柳樽室

路郎生



★残暑がきびしいので、ひたすら、柳友諸氏、愛読者各位のご健勝を祈っております。

★東京は水キキで困っていられる実情を八月に来訪された高須啞三味氏からお聞きして

ご同情申上げておりますが、水を送ってあげる訳にゆかぬので、手をこまぬいているばかりで力にはなりません

★雑誌の遅刊はなかなか取り戻せません。本号も十日頃になるでしょう。ご寛恕をお願い

します。しかし、内容はよくなつても悪くはならぬのがせめてもの慰めです。★本号から

新潟大学の阿達義雄教授から「五世川柳とその句」の稿をいただき

ましたのでご愛読願います。其他の執筆陣は微動だもいたしません

ので心強く思っております。前号で「無季俳句をどうおもうか」の特集に次いで、富野鞍馬氏、東野大八氏等が俳句に触れた記事

を寄せられたのを面白く拝読しております。同じ短詩型だけにいろんな意見も出て、参考になることと思つてお

ります。★土井文鏡君の死は七月二十三日だったので、本号で「文蝶近」を掲げ、故人の霊を慰めることに

しました。本社で追悼句会も営みたいと思つておりますが、九月は川

柳忌なので、十月に譲りたいと思つております。★恒例大阪市文化

祭も昨年から府市合同で開催されましたが、

本年の大阪文化祭川柳大会から大阪府・大阪府教委・大阪市・大阪

市教育の主催でやることになり、番傘、川柳文学、せんば、川柳雑誌の四社が大会のお世話をすることになり、

本年は川柳文学と川柳雑誌が当番で句会をやることになりました。

何れにしても川柳発展のために、みんなが協力して大いにやっ

てもらいたいと思つてい

ます。★川柳婦人友の会は十一月十五日に別稿広告のよう

に秋の集りを催すことになり、この際新

会員を希望される方は阿茶さんまで申込んで下さい。

★八月に開催した川柳柳ゆかた会

遠来の柳友が多数出席され交歓が行なわれたことも主催としては大きなよこびでありま

した。斯した句会から更に新しい芽が出ると

すれば意義のある催しだったと言えるであり

又格別の味がありまし

た。遠く旅している感

を深くしました。即興句に「外遊のすべり出

しも見える部屋」窓あけるさえ感激の旅

の宿」「ホテルからうちへ掛ければ近火なり」のような句がゾクゾクと出来ましたお笑い



ヨクヨ
便箋



★川柳雑支部九月句会

★玉造句会・10日(木)

六時、題、入場券・興

奮・オリンピック、

所、市電玉造南百米大

阪信用金庫、★明和研

究会・13日(日)一

時、題、窓・ジャンプ

・年寄、所、阪神電車

鳴尾駅東南二百米鳴尾

公民館、★京都句会・

16日(水)夕、題、徳

行・妙技・掃除、所、

未定。★阿倍野句会

(文蝶追悼) 20日、

(日)一時、題、個

人・主婦・才能・走

る、所、大阪市阿倍野

区松崎町三ノ一〇割烹

大万、★かがみ句会・

2日(水)夜、題、事

件・真珠・たまさか・

川柳 婦人友の会十周年記念句会

日時 11月15日(日)午後一時

会場 天王寺区宰相山町一四二

西出一栄居

兼題

「十」腹乃先生選「PTA」阿茶選「ひとり」操子

選「読書」良子選「我まま」きさ子選「宝石」一栄選

出席者も兼題全部各題句箋別・裏面に雅秀明記十

一月五日までに投句のこと

席題 当日一題発表

会費 五百円(食費共)

★投句だけの方は五十円封入のこと

投句先 大阪市南区二ツ井戸二三

山川 阿茶宛

お知らせと御礼

父角太郎(文蝶)儀かねて病氣療養中のところ薬

石効なく七月二十三日午前一時五分永眠いたしました

た。ここに生前のご厚情を深謝しお知らせ申し上げます

ます。なお告別を翌廿四日に田原寺に於て営み多数

川柳家諸氏のご焼香をいただきましたこと感謝にた

えません。貴名伺い漏れもあろうかと存じますので

誌上をかりあつてお礼申上げます。

大阪市西成区松通九丁目二二

嗣子 土井 勝彦

妻 きよ

何を選んでいただくか

は先様におねがいして

タカシマヤの商品券を

お贈りするのにも心に

くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から



一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

高島屋



あなたの句帖が再版
されました

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいて
います。句会でお使いになるなり、抜けた句
の整理にお使いになれば、何冊かで、あなた
の句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に
句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい

一冊八〇円(送料二〇円)

発行所

川柳雑誌社

電話 大阪 6081

振替口座 大阪 七五〇五〇

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方が
なかなかうがっていて、一気に
読ませる魅力がある。

価二五〇円
送料八〇円
B6版
二五〇余頁

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年か
ら川柳を手がけているというから
川柳歴はもう六十余年にもなる。
この著者は麻生さんが毎月出し
ている「川柳雑誌」に掲載された
ものを中心にその他の雑誌や句集
からひろった五百六十句につい
て、ひとつひとつ丁寧な注釈を加
えて、鑑賞の手引に資そうとした

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区万代西五丁目二五番地

電話 大阪 671六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

明日を勝ちとる

細胞に飛びこむ活力剤



ヘルタス

アスパラギン酸塩製剤

ヘルタスは高単位剤(150mg)です 30錠 350円・60錠 600円・150錠 1,300円
サンプル・説明書贈呈 大阪市東区道修町 大日本製薬株式会社(ヘルタス係)



新発売

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

さ ぼる 市場段食子選
空 地 本松東岸選
楽 屋 森下愛論選
身 持 大西八歩選
おし 八木摩太郎選
おし 小浜牧人選
九月十五日締切

毎号募集

近作柳梅 麻生路郎選
人生譜 北川春巢選
川柳塔 河野春三選
文 章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
九月十五日締切

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名
雅号を明記する事。
▼ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
▼ 「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が出
来る。
▼ 「川柳塔」の投句は不朽潤会員に限る。

川柳雑誌 第三十九号

定価 二二〇円 (送料六円)

半半年 七五六円(送料六円)

昭和三十九年八月廿五日印刷
昭和三十九年九月一日発行

大阪市住吉区万代西五丁目二五番地
行印刷人 麻生 幸二 郎

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 671六〇八一
振替口座 大阪 七五〇五〇

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿九年九月一日発行 (毎月一回一日発行)

編集 兼 発行 印刷人
藤生幸二郎

発行所
川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二五番地 電話大阪(671)六〇八一

定価 百二十円 (送料六円)

倉敷紡績



洗う...
乾く...

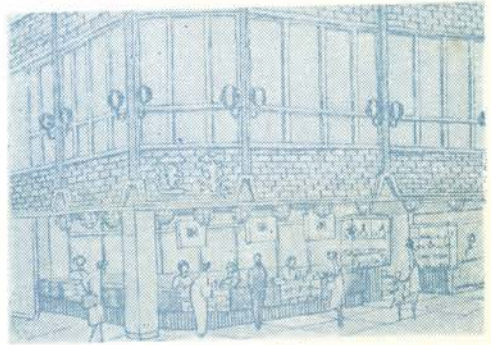
すぐ着られる

東レテロン 65%
高級綿 35%

クニボウ
テロンシャツ

姉妹品 クラボウテロンブラウス

豚饅・焼売



広東料理

蓬萊

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストア店

リキもってこい!



だるい・精力が衰えた・
すぐ疲れる・肌に若さが
ない・こんな時とくにリ
キの効果は見のがせませ
ん リキホルモは高単位
男女両性ホルモン 強精
強心成分 天然ジャコウ
牛黄のほか総合ビタミン
11種強肝剤6種を美しい
新型ユニットカプセルに
収めた強力な薬です

疲労回復・体力増進・精力増強に

リキホルモ



小野薬品

●12カプセル・30カプセル(各携帯容器付)6カプセル・32カプセル

高野山



ラザックス特急「新こうや」号 毎日2往復
なんば発 (1) 8時40分 (2) 13時30分
座席指定券 170円 1週間前から発売

昭和40年

高野山 開創1150年記念大法会
ただいま全国で参拝団を募集中です

(641) 8686

(341) 5038

(716) 8661

南海電車